

# 教育研究業績書

2020年07月16日

所属：健康・スポーツ科学科

資格：教授

氏名：松尾 善美

研究分野	研究内容のキーワード
リハビリテーション科学	心疾患、呼吸器疾患、腎疾患、虚弱高齢者、神経難病、医学的リハビリテーション
学位	最終学歴
博士（保健学）	神戸大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 内部障害理学療法学	2016年12月09日	理学療法学科の学生向けに理解しやすいように工夫したビジュアルテキストを内部障害理学療法学を編集し、一部の項を執筆した。
2. 歩行を診る一観察から始める理学療法実践一	2011年04月	疾病・外傷による歩行障害を呈している対象者を、その病態を踏まえた評価とアプローチについて、臨床に立脚し、整理した。理学療法関係者だけでなく、広く医療関係者、スポーツ関係者にも利用できる。
3. 健康長寿を目指す健康管理学	2011年04月	医療福祉系学生を対象とした健康長寿を目指す健康管理学について分担執筆した。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 表彰「より良い授業方法の工夫と実践」	2016年08月19日	武庫川女子大学学長より標記の表彰を平成28年度前期に受けた。
2. 健康・スポーツ科学研究科委員	2011年04月	
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 上級心臓リハビリテーション指導士	2015年09月	日本心臓リハビリテーション学会認定資格
2. 専門理学療法士（内部障害系、神経系）	2014年04月 現在	（社）日本理学療法士協会認定
3. 呼吸ケア指導士	2013年04月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会認定
4. 心臓リハビリテーション指導士	2002年09月	日本心臓リハビリテーション学会認定資格
5. 呼吸療法認定士	1997年01月	3学会（日本胸部外科学会、日本呼吸器学会、日本麻酔科学会）合同呼吸療法認定士
6. 理学療法士	1984年06月	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. 文部科学省高等教育局大学設置分科会専門委員会委員	2017年11月1日	
2. 日本心臓リハビリテーション学会近畿地方会支部幹事	2017年01月24日	
3. 国際心臓呼吸理学療法士連盟執行役員（日本代表）	2015年05月	
4. 日本心管理理学療法学会運営幹事	2015年04月27日	
5. 日本心臓リハビリテーション学会編集委員会編集委員	2014年09月	
6. 日本心臓リハビリテーション学会指導士認定制度委員会委員	2014年08月2016年07月	
7. 理学療法兵庫査読委員	2012年07月	
8. 健康運動科学研究所発行「健康運動科学」編集委員	2011年04月	
9. 日本心臓リハビリテーション学会評議員	2004年08月	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. パーキンソン病の理学療法	共	2020年06月	医歯薬出版	奈良勲, 松尾善美, 石井光昭, 依藤史郎, 阿部和夫, 大熊泰之ほか パーキンソン病に対する理学療法に関する学術的最新知見を第2版として刷新し、海外の研究者の執筆も含め、編集および執筆した。
2. 移動と歩行—生命とリハビリテーションの根源となるマイクロ・マクロ的視座から—	共	2020年01月15日	医学書院	奈良勲他編 パーキンソン病患者の移動形態、移動評価、移動向上への介入、移動圏拡大に向けた症例について詳細に解説した。
3. 臨床実践 体幹の理学療法	共	2019年08月29日	文光堂	監修: 松尾善美、編集: 橋本雅至 体幹に対する敏腕理学療法士の技術とコツを11テーマに分けて解説した。前半では触診による機能解剖や疾患の特徴から見た運動連鎖の観点からの運動機能障害、機能評価を紹介し、後半では動作分析からみた腰痛発生のメカニズムや外科的治療とその術後理学療法を解説した。また、成長期スポーツ選手の腰痛や非特異的腰痛の特徴、運動連鎖・隣接関節を理解したうえでの介入方法、産業医学の立場から見た腰痛対策についても紹介した。敏腕PTが現場で結果を出すための技術とコツを紹介している。
4. わかる!できる!心臓リハビリテーションQ&A	共	2018年07月10日	医歯薬出版	伊東春樹・百村伸一監修 Q86「運動療法は必ず嫌気性代謝閾値以下行わなければならないのでしょうか?」、Q87「運動療法中は心電図以外に何をモニタリングすればよいのでしょうか?」について単著で執筆した。
5. 臨床実践 肩関節の理学療法	共	2018年05月22日	文光堂	松尾善美監修 監修者として関わった。
6. 統合と解釈による実践!理学療法評価プロセス	共	2018年03月25日	医歯薬出版	上杉雅之監修、西守隆編著 各臓器不全で生じる病態リスクマネジメント「心不全」および臨床における内部疾患の評価—統合と解釈—「心不全」の項を共同執筆した。
7. 解剖学・生理学・運動学に基づく動作分析—動作・行動の分析と統合—	共	2018年01月25日	医歯薬出版	奈良勲、木林勉、松尾善美他 「臥位からの立ち上がり・立位・片足立ち」の項に共同執筆者として関わった。
8. Cardiovascular & Pulmonary Physical Therapy: An Evidence-Based Approach Third edition	共	2018年01月12日	McGraw-Hill Education	P. 715-722 Yoshimi Matsuo 日本の呼吸循環系理学療法の現状について紹介した。
9. PT・OTのための嚥下・栄養マネジメント	共	2017年09月12日	文光堂	糸田昌隆、松尾善美監修 共同監修者として関わり、「サルコペニア、フレイルと嚥下機能」の項を単著で執筆した。
10. 臨床実践 足部・足関節の理学療法	共	2017年05月09日	文光堂	松尾善美監修 監修者として関わった。
11. そのとき理学療法士はこう考える—事例で学ぶ臨床プロセスの導きかた	共	2017年05月01日	医学書院	藤野雄次、松田雅弘、畠昌史、田屋雅信、松尾善美他 第4章評価をどう活用するか。神経筋疾患、パーキンソン病の評価について単著で解説した。
12. 図解運動療法ガイド	共	2017年03月30日	文光堂	内山靖、奈良勲、松尾善美他 II部、実際、A.症状の「運動耐容能」の項を単著で執筆した。
13. PT・OTビジュアルテキスト 内部障害理学療法学	共	2016年12月09日	羊土社	松尾善美編 ビジュアルな図表を駆使した理学療法学科生向けの内部障害理学療法学のテキストであり、編者として、また「内部障害の概要」、「包括的リハビリテーション・チーム医療」、「根拠に基づいた理学療法の実践」、「理学療法の進め方」の項を単著で執筆した。
14. 臨床実践 変形性関節症の理学療法	共	2016年05月	文光堂	松尾善美監修 監修者および「心疾患を伴う膝OAの運動療法を考える」の共同執筆者として関わった。
15. 実践EBM 心臓リハビリテーション	共	2016年05月	文光堂	松尾善美・上嶋健治編集 編集者および「第III章心臓リハビリテーション難渋症例の攻略法」における「病識が乏しい末梢動脈疾患患者」、「血圧管理に難渋する大動脈解離術後患者」 —血圧管理のために運動強度の調整が必要であった症例—、「低心機能患者—急性心不全治療後、運動療法開始に難渋した症例—」、「維持期の外来患者—長期フォローアップを行った症例—」、「介護老人保健施設利用者」に共同執筆者として関わった。
16. 姿勢制御と理学療法の実践	共	2016年04月	文光堂	浅井仁、奈良勲、松尾善美他 「パーキンソニズム」の項に共同執筆者として関わった。
17. 運動療法学テキスト改訂第2版	共	2015年03月3	南江堂	松尾善美、浅井剛、山本悟、植松光俊、大川裕行、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
18. 脳卒中理学療法ベスト・プラクティスー科学としての理学療法実践の立場からー	共	2014年09月15日	文光堂	明日徹ほか 運動と物質代謝の項で、運動時のエネルギー代謝、水分・電解質、体温調節機構について述べた。 奈良勲、松尾善美、土山裕之、星文彦、森岡周、中野英樹ほか 脳卒中理学療法を科学としての理学療法実践の立場から編集に関わり、「ベスト・プラクティスと脳卒中理学療法の結合」について単著で解説した。
19. 回復期につながる急性期理学療法の実践	共	2014年05月18日	文光堂	松尾善美、井上悟、井手睦、今井保、尾谷寛隆、碓山泰匡、鶴飼正二ほか 回復期リハビリテーションに移行する可能性が高い疾病、外傷を取り上げ、急性期理学療法の実践について解説した。
20. パーキンソン病に対する標準的理学療法介入	共	2014年01月30日	文光堂	松尾善美、鎌田理之、平賀よしみ、橋田剛一、長澤弘ほか 本書籍の編集およびパーキンソン病に対する標準的介入構築の必要性、認知負荷を含む動作・運動分析の手順とクリニカル・リーズニング（歩行障害を中心に）、訪問理学療法の実践を執筆した。
21. 心理・精神領域の理学療法 はじめの一歩	共	2013年4月20日	医歯薬出版	奈良勲、富樫誠二、仙波浩幸、山本大誠、松尾善美ほか 神経難病患者の理学療法における心理・精神的対応について解説した。
22. パーキンソン病の理学療法	共	2011年05月10日	医歯薬出版	奈良勲、松尾善美、依藤史郎、阿部和夫、大熊泰之ほか パーキンソン病に対する理学療法に関する学術的最新知見を海外の研究者の執筆も含め、編集および執筆した。
23. 健康長寿を目指す健康管理学	共	2011年04月	八千代出版	松尾善美、岡田悦政、近藤照敏、白石安男、萩本逸郎、神田裕子他 現在の健康管理のあり方、問題点を取り上げ、必要に応じて最先端事例、最新情報を紹介することを基本にしている。そのうえで健康管理をどのような方向性で進めるべきかを説明、解説している。医学、保健学、栄養学、体育学等様々な分野からアプローチする、健康管理学の新しい体系を示す書籍である。
24. 歩行を診る	共	2011年04月	文光堂	松尾善美、畠中泰彦、八木範彦、福島隆伸、古谷逸夫、久保秀一他 疾病による歩行障害を呈している対象者を、その病態を踏まえてどのように機能診断・評価し、どのように理学療法アプローチしていくかを、臨床に立脚し、明確に整理した書籍である。まず歩行に関連する事項を整理し、次に各論では臨床に即した理学療法士による各疾患の歩行の診かたとそのアプローチを提示している。臨床症例に対する臨床実践とその背景的理論をバランスよく配置した。
25. Cardiovascular & Pulmonary Physical Therapy 2nd edition: An Evidence-Based Approach second edition	共	2010年12月	McGraw-Hill Company	Yoshimi Matsuo 日本の呼吸循環系理学療法の現状について紹介した。
26. 極める!!最新呼吸リハビリテーションー今すぐできる栄養リハビリテーション・IADLトレーニングー	単	2010年10月	南江堂	ADL/IADLトレーニングにおける理学療法士の役割について解説した。
27. 運動療法学テキスト	共	2010年10月	南江堂	松尾善美、浅井剛 運動時のエネルギー代謝についてこれまでの知見を集積し、学生向けに解説した。
28. 現場の疑問に答える 心臓リハビリ徹底攻略Q&A	共	2010年07月	中外医学社	高島千敬、松尾善美 ADL・作業療法 「心臓リハビリ患者のADL評価にはどのようなものがあるか教えてください。」「息切れが強い患者へのADL改善にはどのような指導が必要でしょうか?また、他疾患の場合と異なるポイント、注意点について教えてください。」について具体的に回答した。
29. 心臓リハビリテーション必携	共	2010年05月	コンパス	松尾善美、西村真人 心大血管疾患手術後早期の理学療法における心大血管術後の呼吸理学療法および心疾患を有する廃用症候群患者の理学療法について解説した。
30. ICUのための呼吸理学療法	共	2010年03月	メディカ出版	松尾善美、南正人 臓器移植前後の呼吸理学療法、とくに肺移植について述べた。
31. 理学療法ハンドブック	共	2010年02月	協同医書出版	鎌田理之、松尾善美、井上悟 パーキンソン病患者の理学療法は、動作指導や廃用症候群の予防を含む二次性・複合的機能障害の改善に効果的である。さらに、PDの一次性機能障害への介入方法の確立へ向けた理解が進みつつある。PD患

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
32. Brain Topography and Multimodal Imaging	共	2009年09月	Kyoto University Press	者の活動制限には運動障害（パーキンソニズム）だけではなく注意機能を含めた認知機能が関連しており、PDの理学療法は今後、認知機能の関連も考慮しながら、PD患者の障害改善に向け取り組む必要がある。 Kamata N, Matsuo Y, Abe K Brain activity during perception of reachabilityの研究について述べた。
33. 理学療法臨床判断フローチャート—臨床経験と臨床判断のインターアクション—	共	2009年05月	文光堂	松尾善美（編著） 臨床経験と臨床判断のインターアクション、パーキンソン病の歩行障害、心臓血管術後の離床について述べた。
34. 理学療法MOOK16脳科学と理学療法	共	2009年03月	三輪書店	松尾善美, 鎌田理之, 阿部和夫 パーキンソン病の病態、運動制御および運動学習における大脳基底核機能、脳イメージング研究におけるパーキンソン病の病態、脳イメージング研究成果に基づいたパーキンソン病のリハビリテーションについて詳述した。
35. 考える理学療法[内部障害編]—評価から治療手技の選択—	共	2008年12月	文光堂	西村真人, 松尾善美 心臓を手術したのに運動させても大丈夫なのか?—心臓外科手術の理学療法—評価から再発予防まで、について述べた。
36. Accidental Falls: Causes, Preventions and Interventions	共	2008年12月	Nova science publishers	Kamata N, Abe K, Matsuo Y, Inoue S Accidental Falls and Overestimation of Stability Limits in Parkinsonian Patientsについて述べた。
37. 呼吸理学療法標準手技	単	2008年05月	医学書院	肺移植に対する理学療法について述べた。
38. 理学療法のとらえかたPART4—Clinical Reasoning	単	2007年04月	文光堂	臓器移植法が制定され、心臓移植・肺移植を始めとした臓器移植が日本で始まった。重症心疾患、肺疾患では移植前後において廃用、運動耐容能、新しい心肺機能に対する理学療法は重要であり、著者の臨床経験を交えて解説した。
<b>2 学位論文</b>				
<b>3 学術論文</b>				
1. 筋輝度の皮下脂肪厚補正と全身持久力との関連	共	2019年8月	日本臨床運動療学会誌20(2):33-36	神田龍馬、松尾善美、鎌田理之、松本ゆかり、木原一晃、橋田剛一 青壮年者において、筋硬度の皮下脂肪厚補正は特に女性で筋硬度と全身持久力との関連を明らかにする点で有用であり、補正筋硬度は性別を問わず、全身持久力を反映する可能性が示唆された。筋硬度は超音波エコーで安全かつ簡便に測定可能な骨格筋の質的指標であり、皮下脂肪厚補正の導入は筋硬度の評価指標としての価値を高める上で有用である。補正筋硬度は対象者の全身持久力改善に向けた有用な介入指標の一つとなり得る可能性がある。
2. ベルト式電気刺激における刺激部位の違いが刺激出力および酸素摂取量に及ぼす影響	共	2019年11月23, 24日	第48回四国理学療法士学会誌	柳澤 幸夫, 松尾 善美 本研究では異なる刺激部位において耐え得る刺激出力レベルや刺激による酸素摂取量の違いについて検証し、効果的な刺激部位を明らかにすることを目的とした。結果、電気刺激での刺激部位では傾斜度80度または立位姿勢が刺激出力を高く設定でき、酸素消費量も高いことが明らかとなった。つまり、立位保持できない方にはtilt tableを用いて傾斜度を高くすること、立位保持できる方には立位姿勢での刺激が効果的であると考えられる。
3. 心疾患入院患者の離職の実態調査	共	2019年07月10日	総合リハビリテーション. 47(7):691-696.	西村真人、松尾善美、根来政徳、箕岡尚利、岡元進一、田中彰博、平林伸治 本邦における心疾患患者の離職の因子が明らかでない。対象は、大阪労災病院に心疾患で入院した249名の患者であった。アンケートで入院前の就労状況、退院後の復職状況とカルテより背景因子を抽出し、離職と復職の2群間で比較、検討した。心疾患患者の離職抑制には、心不全患者に対しては運動耐容能の維持・改善を目的とした長期的な心臓リハビリテーションが必要である。
4. Hemodynamic response to orthostatic stress immediately after dialysis session in chronic hemodialysis patients	共	2018年11月23日	Renal Replacement Therapy 4:49	Toshiyuki Mochizuki; Yoshimi Matsuo; Mayumi Sasaki; Kenichi Morihisa; Sakuyoshi Tabata; Toyofumi Fukuda; Ibuki Yajima Orthostatic hypotension is a risk factor for falls among chronic hemodialysis (HD) patients. This study aimed to investigate the hemodynamic response to orthostatic stress immediately after an HD session. Twenty-one HD patients (mean age, 70.2±8.1 years; HD duration, 7.5±6.4 years) participated in this study. Each 5-min hemod

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
5. 男性透析患者の筋量と栄養、脂質代謝との関連に関する検討	共	2017年09月01日	大阪透析研究会会誌35:119-122	ynamic monitoring was performed in the supine, semi-recumbent, and sitting positions immediately after an HD session. Hemodynamic variables were measured using a noninvasive beat-to-beat monitoring device during the test. Patients were divided into an intradialytic hypotension (IDH) group and a non-IDH group according to the presence or absence of IDH on the day of the measurements, and intra- and intergroup comparisons were performed. In the IDH group, the nadir values of systolic blood pressure in the semi-recumbent and sitting positions were significantly lower than those in the supine position and the last systolic blood pressure in the semi-recumbent position. The nadir of stroke volume in the sitting position was significantly lower than that in the supine position. There were no statistically significant intergroup differences in the changes for any positions. These results suggest that patients with IDH require special attention when getting out of bed to prevent post-dialytic falls.
6. 超音波画像診断装置による側腹筋の評価—咳嗽時における側腹筋厚変化の信頼性—	共	2016年3月10日	大阪行岡医療大学紀要3:19-24	望月寿幸、松尾善美、石丸達人、森久賢一、佐々木眞弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹 男性維持血液透析患者を対象に、筋量と栄養、脂質代謝に関する因子の関係を調査した。大腰筋の筋量指標に独立して関連した因子は、BMI、アルブミン、年齢、総コレステロールであった。男性透析患者の筋量を維持、増大させるための方策を検討する際には、栄養状態を考慮する必要がある。
7. Effect of a postoperative outpatient pulmonary rehabilitation program on physical activity in patients who underwent pulmonary resection for lung cancer.	共	2016年05月	Geriatr Gerontol Int 16(5):550-555.	井坂昌明、堀竜次、杉本研、松尾善美 健康成人を対象として、超音波画像診断装置による筋厚測定時の側腹筋厚変化の検者内信頼性を確認した。 Maeda K, Higashimoto Y, Honda N, Shiraishi M, Hirohata T, Minami K, Iwasaki T, Chiba Y, Yamagata T, Terada K, Matsuo Y, Shuntoh H, Tohda Y, Fukuda K The present study investigated the effect of outpatient rehabilitation on physical activity (PA) in patients with cancer after lung resection. Patients with lung cancer were recruited and completed a preoperative rehabilitation program. One group completed a postoperative outpatient pulmonary rehabilitation program and another group of 10 patients did not, but were similarly followed up. PA level (PAL) was not different between groups. However, postoperative versus preoperative PAL was significantly lower in the control versus the rehabilitation group (P<0.01), and PAL decline was less for the rehabilitation versus the control group (P<0.001). A subgroup analysis showed improvement in postoperative PAL in rehabilitation patients aged <75 years and older.
8. 壮年循環器疾患患者の復職に関わる要因	共	2016年04月25日	心臓リハビリテーション21:180-186	高瀬広詩、松尾善美、平林伸治、村上直也、小田実、小倉理代、日浅芳一 壮年循環器疾患患者の復職には、医学的要因だけでなく社会的要因も大きく関わっており、雇用者側と連携した復職支援が重要であると考えられた。
9. 地域在住高齢透析患者の活動範囲に心理社会的要因がおよぼす影響に関する検討	共	2016年03月01日	大阪透析研究会誌34:25-30, 2016	望月寿幸、松尾善美、森久賢一、佐々木眞弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹 75歳以上の地域在住維持血液透析患者を対象に、活動範囲とソーシャルサポート (SS) および意欲の低下に関する調査を実施し、検討した。女性は多くのSSを知覚し、大切な人のサポートが大きいほど活動範囲が広がった。また、活動範囲の得点が低い患者では、SSが大きいほど活動範囲は広がった。それらの関連は筋量やBMIと独立していた。身体活動を促す患者教育に際しては、家族、友人関係に配慮する必要があると考えられる。
10. 下肢筋への経皮的電気刺激が血圧・心拍・脈波伝搬速度に及ぼす影響	共	2016年	四国理学療法士学会誌38:166-167	柳澤幸夫、松尾善美、橋田誠一、鶯 春夫 下肢筋への経皮的電気刺激は血圧・心拍数を軽度増加させた。脈波伝搬速度は刺激後20分まで有意に低下しており、有酸素運動と同等の効果を生じさせることが判明した。
11. 太極拳による高齢者の呼吸機能に与える影響	共	2015年12月	日本予防医学会雑誌10:75-81	井坂昌明、堀竜次、王 中奇、杉本 研、松尾善美 健康若年者と太極拳を実施している高齢者を比較し、高齢者の呼吸機能に与える影響を検討することを

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
12. 肺癌術後早期離床に関連する因子の検討	共	2015年07月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌25: 267-271	<p>目的とした。健常高齢者の外腹斜筋と腹横筋の筋厚変化率は有意に高値を示し、腹横筋の筋厚変化率は咳嗽・呼吸機能、呼吸筋力で有意な相関を認めた。したがって、太極拳を実施している高齢者では腹横筋を主とした側腹筋の筋厚変化が呼吸筋力を維持し、呼吸機能に影響していることが示唆された。</p> <p>木原一晃、鎌田理之、松尾善美、橋田剛一、川村知裕、平田陽彦、藤村まゆみ、井口和江、木島貴志、奥村明之進</p> <p>早期離床は肺癌術後周術期管理の重要な課題の1つである。私たちは肺癌術後患者の早期離床に関連する因子を、栄養指標を含む術前因子や術中因子から検討した。肺癌手術患者で呼吸リハビリテーションを施行した45例に対し、年齢等の背景因子、術前の Geriatric Nutritional Risk Index (GNRI) や呼吸機能、肺切除割合等と術後病棟歩行自立までの日数を調査した。その結果、術後2日以内に病棟歩行が自立した群(24例)は歩行が遅延した群(21例)より GNRI が有意に高値(102±5/97±8)、肺切除割合が低値(14±8%/22±10%)となった。さらに、多重ロジスティック回帰分析でも GNRI と肺切除割合は術後2日以内病棟歩行自立に影響し、ROC 曲線によるカットオフ値は GNRI で99、肺切除割合で21%を示した。以上より、術前栄養状態及び手術侵襲の程度が肺癌術後患者の早期離床に影響することが示された。</p>
13. 呼吸同調器の使用有無により酸素化が異なった一症例	共	2015年07月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌25: 276-278	<p>柳澤幸夫、竹田絵理、松尾善美、山村篤司郎、堀内宣昭</p> <p>呼吸同調器の使用有無により酸素化が異なった症例を経験したので、若干の考察を加え報告する。対象は85歳、女性で6ヶ月前より、間質性肺炎にてHOT施行中である。本症例の呼気・吸気時間からIE比および呼吸数を算出した。また、呼気・吸気時間を比較し、さらに運動負荷時のSpO2変動を記録した。その結果、連続と比べ、同調ではIE比で呼気比が短縮し、呼吸数が増加した。また、呼気・吸気時間において吸気は有意差なく、呼気は有意差を認めた。運動負荷では同調式でSpO2の大きな低下を認めた。本症例と同様のケースでは、同調器の使用有無での酸素化変動を確認し、呼吸法の指導や酸素の投与方法の検討などが必要である。</p>
14. 慢性心不全患者に対する活動量計を用いた在宅型運動管理の効果	共	2015年06月17日	心臓リハビリテーション 20:326-332	<p>高瀬広詩、松尾善美、柳澤幸夫、東根孝次、小田実、真鍋誠、嶋田悦尚、小倉理代、高橋健文、日浅芳一</p> <p>現存のプログラムに参加できない患者に対する新たな治療選択として、我々が行った在宅型運動プログラムを紹介した。本プログラムは退院後のCCR参加率向上に寄与すると考えられるが、まだ症例数が少なく観察期間も短いため、さらに検討を重ねていく必要がある。</p>
15. 慢性心不全患者への理学療法士主導による在宅型運動管理の効果	共	2015年04月	理学療法学42:105-113	<p>高瀬広詩、松尾善美、柳澤幸夫、東根孝次、小田実、真鍋誠、嶋田悦尚、小倉理代、高橋健文、日浅芳一</p> <p>入院治療を要した慢性心不全患者の退院後早期における在宅型運動管理の効果を検証すること。当院に慢性心不全の診断名で入院した35名を介入群(17名)と対照群(18名)に無作為に割り付けた。介入群は退院後3ヶ月間身体活動量計を装着し、理学療法士が週1回電話で歩数と心不全兆候を確認した。また、患者毎に定めた目標歩数まで段階的に増加させるSTEP表を作成し、目標の達成状況に応じて歩数を増加させた。退院時および退院後1ヶ月、3ヶ月時点で6分間歩行距離、5m歩行時間、健康関連QOL (SF-36) を評価した。適格患者の80%が本研究に参加した。また、介入群のうち71%の患者が本プログラムを完遂した。対照群と比較して介入群では6分間歩行距離が有意に延長し、5m歩行時間は有意に短縮した。SF-36においては身体的側面と役割・社会的側面のサマリースコアが介入群のみ有意に改善した。退院後早期の慢性心不全患者に対する理学療法士主導の在宅型運動管理は、有効な管理方法である。</p>
16. 地域理学療法を実施している高齢パーキンソン病患者の栄養状態	共	2015年03月	理学療法京都44:72-78	<p>奥山紘平、松尾善美、上田祥博</p> <p>Geriatric Nutritional Risk Index (GNRI) を使用し、地域で理学療法を実施している高齢パーキンソン病 (Parkinson's disease ; PD) 患者の栄養リスクについて調査を行った。PD患者50名のGNRIを算出し、栄養の重症度リスクを分類した。また、Hoehn-Yahrの重症度分類 (H-Y分類)、GNRIスコア、体格指数 (Body mass index ; BMI) それぞれの関連性について検討した。栄養リスクありは28名 (56%) であった。GNRIスコアとH-Y分類は高い負の相関を示した (r=-0.76, p&lt;0.001)。BMIとH-Y分類は弱い負の相関を示した (r=-0.36, p&lt;0.01)。地域で理学療法を実施</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
17. 在宅介護者における災害時避難行動の意思決定に影響を及ぼす要因の検討	共	2015年03月	四国理学療法士会学会誌37:78-79	<p>柳澤幸夫, 中村武司, 直江貢, 黒上久美子, 山本修, 佐藤俊徳, 瀬戸裕二, 松尾善美</p> <p>要介護者の年齢は77.7±10.3歳, 疾患分類の上位は骨関節36.9%, 中枢神経31.5%であった。介護者の年齢は69.3±11.8歳であった。避難意思の有無では, 避難する54.6%, 避難しない37.7%であり, この2群間のBIは避難する75.0 (55.0-85.0), 避難しない50.0 (17.5-77.5) で有意差 (p&lt;0.01) を認めた。要介護度1~5を3つに区分し, 要介護レベル別の避難意思では要介護度1で避難しない25.0%, 要介護度4・5では61.5%となった。避難しない理由は, 自宅にいたい57.1%, 避難手段がない49.0%であった。車椅子は46.9%が保有しているが, 車椅子の有無と避難意思の有無の関連については有意差を認めなかった。災害時における事業所への要望は, 多職種連携65.8%, 薬などの物資配達65.0%, 安否確認50.0%であった。他のサービス利用状況では, 訪問看護を利用している方は23.8%であった。</p>
18. 術前低移動能力は, 術後歩行回復に影響する	共	2015年03月	心臓リハビリテーション20:1-20	<p>西村真人, 松尾善美, 大久保裕介, 古田宏, 河村知範, 前宏樹, 東上震一</p> <p>肢体不自由による術前低移動能力が, 術後の歩行回復にどの程度影響を与えるかを明らかにすること。当院心臓血管外科で行われた待期的冠動脈バイパス術症例 473名を術前より心疾患症状以外の原因で200m歩行が困難な症例群と可能な群に分割し, 患者背景・術後経過を比較した。また, 低移動能力が術後の歩行回復にどの程度影響を与えるのかを明らかにするために, 歩行回復が術後8日目以降になった症例を従属変数とした多変量Logistic回帰分析による要因分析をおこなった。多変量Logistic回帰分析で有意差を認めたのは, 低移動能力, 80歳以上, NYHAⅢ, 維持血液透析症例であった。術前低移動能力は, 術後歩行回復遅延を予測する要因であり, 術前に低移動能力である症例は, 歩行が順調に回復できない。</p>
19. 長期療養高齢患者の運動機能が栄養状態に与える影響	共	2015年01月	理学療法徳島4:39-42	<p>矢野 広宣, 松尾 善美, 柳澤 幸夫, 直江 貢, 國友一史</p> <p>栄養サポートチームが介入した長期療養高齢患者の運動機能 (M-FIM) がGNRIに与える影響について検討したので報告する。対象は, 2011年 11月からの1年間に介護保険療養病棟において, 経口摂取可能な43名とし, 方法は, 身長, 体重, BMI, Alb, M-FIM, FIMの認知項目 (C-FIM) を診療録より抽出し, GNRIを算出した。M-FIMは中央値23点で上位群と下位群に分類し, 栄養評価・心身機能との関係と比較・検討した。GNRI, Alb, BMIは下位群より上位群で有意に高値を示したが, 体重とC-FIM には有意差がなかった。また, M-FIMとGNRI重症度リスク分類との関連性には有意な偏りがあり, 栄養障害を予測するGNRIのカットオフ値は86.01であった。慢性期リハビリテーションの実施にあたり, 栄養評価のカットオフ値をバイタルサインの1指標とし, これに基づいた運動負荷量の設定・調整を行うことが重要である。</p>
20. 理学療法士における喀痰吸引の実態調査—現状およびインシデントについて—	共	2015年01月	理学療法徳島4:8-12	<p>柳澤幸夫, 中村 武司, 松尾 善美</p> <p>徳島県下の理学療法士にアンケート調査を行い, 現場での喀痰吸引の実態, またインシデントの有無とその内容を明らかにすることを目的とした。対象は徳島県理学療法士会に所属する 715 名とし, 郵送にて回収した。調査内容は, 対象者の属性, 吸引行為の有無, 対象者の疾患分類, 吸引カテーテルの挿入箇所, 挿入範囲, インシデントの有無, その内容とした。715 名中, 540 名から回答を得た。吸引の実施率は 21.3%であり, 疾患分類は順に呼吸器疾患, 脳疾患, 神経筋疾患であった。吸引の挿入箇所・範囲は口腔が最も多かった。インシデントは 20.9%あり, 内容は順に呼吸状態, 感染管理, 吸引操作の手順であった。今後, インシデント内容を考慮したリスク管理を含めた研修会の開催が必要である。</p>
21. The Feasibility of Expiratory Resistive Loading Using the Threshold Inspiratory Muscle Training Device	共	2014年09月	Cardiopulmonary Physical Therapy Journal 25:92-95	<p>Yoshimi Matsuo, Yukio Yanagisawa, Lawrence P. Cahalin</p> <p>Purpose: Expiratory muscle training (EMT) has substantial clinical utility in many different populations. We hypothesized that the expiratory pressures of the Threshold IMT used in reverse</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
22. 兵庫県下における開心術後の心臓リハビリテーションの現状と今後課題	共	2014年06月	心臓リハビリテーション19:236-240	will reflect the pressures calibrated for inspiratory muscle training (IMT) which would enable both IMT and EMT to be performed using the same device. Methods: Two experiments were performed to compare the Threshold IMT device-in-reverse pressure to that of the actual pressure measured under 2 separate conditions including manually generated expiratory flow using a bag-mask valve device and expiratory flow generated by 6 healthy subjects. Results: The first experiment examining the effects of airflow introduced via bag found that the pressure quickly achieved the calibrated pressure and then decreased slightly, but maintained a pressure similar to that calibrated on the Threshold IMT device. The second experiment found results similar to the first trial, but with greater maintenance of the Threshold IMT device calibrated pressure. No significant difference was observed between the Threshold IMT device-in-reverse pressures to those that were measured directly during both experiments. Conclusion: The calibrated pressures of the Threshold IMT used in reverse reflect the pressures calibrated for IMT which enables both IMT and EMT to be performed using the same device. 本田祐、久保清景、谷口良司、民田浩一、藤久和、藤田雅史、水谷和郎、松尾善美ほか 兵庫県内の開心術後心臓リハビリテーションについての現状を調査し、問題点を検討した。18施設より回答が得られ、全国と比較して実施率はほぼ同等であった。患者教育プログラムの質の改善および心臓外科医の心臓リハビリテーションへの参加率の向上が今後の課題である。
23. 2型糖尿病患者に対する有酸素運動実施前後の血糖値の提示が動機づけに与える影響	共	2014年03月15日	プラクティス31:252-258	笠原正資、松尾善美、柿花宏信、森下 真帆、山下拓、高田健司、深水真希 2型糖尿病患者に対し、運動前後の血糖値の提示が運動の動機づけに与える影響を自己決定理論の視点から検討した。糖尿病教育入院に参加した2型糖尿病患者52名を対象とした。対象者には、運動療法の講義と有酸素運動を実施し、運動実施前後の血糖値を提示した。運動の動機づけはBehavioral Regulation in Exercise Questionnaire-2を用いて行い、提示前後の動機づけを比較検討した。血糖値は運動の実施により、有意に低下した。動機づけは提示前後で、内発的調整と同一視的調整が有意に向上した。また、Relative Autonomy Indexも有意に向上した。運動療法の急性効果の提示により、自己決定性の高い下位尺度が向上し、運動の習慣化や継続を支援するうえで重要な介入方法になることが示唆された。
24. 訪問リハビリテーション利用者に対する災害時の安否確認対策－災害伝言ダイヤルを用いて－	共	2014年03月	理学療法徳島3:2-4	柳澤幸夫、中村武司、直江貢、黒上公美子、山本修、佐藤俊徳、瀬戸裕二、松尾善美 NTTが提供する171を使用し、災害時の171使用における現状を明らかにすることを目的とした。対象は、要介護者の介護者である103名である。調査内容は、属性、171の認知度や習得までの回数、使用感、携帯電話の所持、停電時の固定電話の使用可否、年齢との関係とした171の認知度は19%、習得までの回数は2回以上が33%、使用困難感ありは11%、携帯電話所持は75%、固定電話は47%が使用可能であった。また、年齢と認知度は有意差を認めず、年齢と習得までの回数、使用感、携帯電話の所持は有意差を認めた。171の認知度が低いことや練習の必要性が明らかになり、個々の介護者にあった指導や定期的な使用練習などを実施すれば、安否確認として171を有効利用できると考えられた。
25. 心臓手術前より歩行が困難な症例の特徴	共	2014年02月24日	心臓リハビリテーション 19:70-77	西村真人、松尾善美、大久保裕介、古田宏、河村知範、前宏樹、東修平、頓田央、東上震一 運動機能障害による歩行困難を有する開心術症例の手術前後の特徴を把握すること。2008年1月から2010年6月までに、当院心臓血管外科で行われた開心術症例 787名を、運動機能障害のために歩行に補助具・介助を要する症例や200m歩行不可能な症例群（以下、歩行困難群）と介助・補助具なしに200m歩行可能な症例群（以下、対照群）に分割し、患者背景・術後経過を比較検討した。 歩行困難群は対照群に比べ、高齢で呼吸機能障害や慢性腎疾患を有し、術前の移動能力レベルに達するまでに日数を要した。主な原因としては、脳血管疾患、変形性関節症、脊椎障害・腰痛が多かった。歩行困



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
26. Effect of expiratory resistive loading in expiratory muscle strength training on orbicularis oris muscle activity	共	2014年02月	J. Phys. Ther. Sci. 26:259-261	<p>難群は、高齢で併存症を多く有し、術前の移動能力レベルに達するまでに日数を要した。今後、ADLレベルや疾患に応じた適切な術前介入、最適な頻度、強度を検討する必要がある。</p> <p>Yukio Yanagisawa, Yoshimi Matsuo, Hisato Shuntoh, Noriaki Horiuchi                      [Purpose] The purpose of this study was to elucidate the effect of expiratory resistive loading on orbicularis oris muscle activity. [Subjects] Subjects were 23 healthy individuals (11 males, mean age 25.5±4.3 years; 12 females, mean age 25.0±3.0 years). [Methods] Surface electromyography was performed to measure the activity of the orbicularis oris muscle during maximum lip closure and resistive loading at different expiratory pressures. Measurement was performed at 10%, 30%, 50%, and 100% of maximum expiratory pressure (MEP) for all subjects. The t-test was used to compare muscle activity between maximum lip closure and 100% MEP, and analysis of variance followed by multiple comparisons was used to compare the muscle activities observed at different expiratory pressures. [Results] No significant difference in muscle activity was observed between maximum lip closure and 100% MEP. Analysis of variance with multiple comparisons revealed significant differences among the different expiratory pressures. [Conclusion] Orbicularis oris muscle activity increased with increasing expiratory resistive loading.</p>
27. 心不全入院患者の再入院群と非再入院患者との比較	共	2014年01月	理学療法兵庫19:31-35	<p>池田真治, 竹内香理, 梶平司, 藤田雅史, 松尾善美                      心不全患者の再入院危険因子と在院期間を調査した。2010年6月から2011年10月までに当院に心不全で入院し、自宅退院した患者93名を対象とした。再入院しなかった患者74名(以下A群)と複数再入院した患者(以下B群)とした。A群データ(以下A)とB群の初回入院時データ(以下B1)、B群の2回目入院時データ(以下B2)を比較・検討した。B1の左室内径短縮率はAより低値で、B1のクレアチニン値はAより高かった。B2の冠動脈疾患管理室在室日数はAより短かったが、一般病床在室日数はB2が長かった。心不全患者の再入院危険因子として心機能と腎機能が関与し、再入院患者は重篤な心不全症状を認めないものの、退院までに時間を要することが示唆された。</p>
28. 呼吸筋トレーニングが在宅要介護認定者の呼吸指標および嚥下機能に与える効果	共	2013年12月	健康運動科学3:13-18	<p>松尾善美, 柳澤幸夫, 直江貢, 中村武司, 堀内宣昭                      在宅要介護認定者に対するセルフトレーニングによるEMT実施前後での呼吸機能・呼吸筋力・嚥下機能を比較することによって、その効果を明らかにすることを目的とした。Barthel Indexの高低とEMT開始からの時期による分散分析で、Barthel Indexの高低とEMT開始からの時期には交互作用はなく、Barthel Indexの高低とEMT開始からの時期の両方に主効果を認めた(p&lt;0.001, p&lt;0.05)。MEPのみ開始前よりEMT3週目、4週目で有意に高値を示した(p&lt;0.05)。Barthel Index75点以上群が75点未満群より有意に高かった呼吸指標、呼吸筋力、咳嗽能力は、%FVCはEMT前とEMT1週目で、MIPはEMT2週目から4週目で、MEP, PEF, PCE Fは全時期であった(p&lt;0.05)。また、RSSTについては開始前と開始後4週目後で有意差がなかった。</p>
29. 多発外傷後に肺機能が低下し、肺の再拡張にむけた呼吸リハビリテーションが有用であった一症例	共	2013年10月13日	第24回徳島県理学療法士学会誌	<p>児玉亮太, 柳澤幸夫, 中村武司, 松尾善美                      交通事故により多発外傷を呈し、手術、加療目的で入院となり、入院後7日目よりPT介入、9日目に肺炎発症し、痰の自己喀出困難、呼吸状態悪化し、気管切開となった症例について報告した。</p>
30. 在宅高齢心不全患者における運動の実態調査	共	2013年10月	理学療法科学 28:583-587	<p>高瀬広詩, 松尾善美, 柳澤幸夫, 東根孝次, 小田実, 真鍋 誠, 嶋田悦尚, 小倉理代, 日浅芳一                      在宅における高齢心不全患者の運動実施状況を調査し、有効な運動指導方法を考案するための参考資料とすること。入院中に運動指導を受けた75歳以上の心不全患者54名。郵送によるアンケート調査により、運動の行動変容ステージ、運動の必要性の認識、運動を行う上での問題点、医療・介護サービスの利用状況、健康関連QOLを調査した。【結果】分析対象者の77%が運動の必要性を認識し、64%が運動を行っていたが、具体的な指導内容は十分には反映されていなかった。高齢心不全患者においては、退院後も身体状況の変化に応じた運動内容の見直しが必要である。</p>
31. 胸部損傷後に無気肺に対するManu	共	2013年03月	神戸学院総合リハビリ	<p>柳澤幸夫, 松尾善美, 出口憲市, 川村圭司, 中村武</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
al Hyperinflationの効果			テーション研究 8:111-117	司、片川雅友、堀内宣昭 Manual Hyperinflation (MH) による徒手肺膨張は無気肺や痰の排泄などに有効であるが、加圧による圧及び容量損傷や出血などのリスクを伴うことが知られている。今回、胸部損傷に無気肺を併発した2例に、無気肺の治療や痰喀出促進の目的にBag valve mask を用いて加圧時の圧を観察しながらMHを試みた。結果、症例1と症例2ともにMHの加圧による合併症を併発せず、無気肺は改善した。これらのMHを使用した治療経験について若干の考察を加え、報告する。
32. 施設入所者における身体機能と口腔機能および栄養状態の関連性	共	2013年03月	四国理学療法学会誌35:154-155	鈴江正基, 平澤小百合, 高木賢一, 佐藤央一, 柳澤幸夫, 松尾善美 介護老人保健施設に入所している要介護高齢者に対し、身体機能と口腔機能および栄養状態の関係を明らかにする目的にて調査を行った。対象は当院に併設する介護老人保健施設に入所中の27名(男性10名, 女性17名, 84.8±8.8歳)とした。 要介護度では移乗自立群で平均介護度2.5, 非自立群3.5, BIでは移乗自立群平均70.8±13.0点, 非自立群31.2±7.8点であった。最大舌圧において自立群は平均22.7±6.4kPa, 非自立群は16.1±7.6kPaであり有意差が認められた。(P=0.03) RSSTでも2群間に有意差が認められる結果となった。(P=0.04) 握力では、移乗自立群7.9±3.7kg, 非自立群5.6±5.6kgであり、MNA-SFでは平均9.8±2.0点8.1±3.3点であった。2群間に有意差は認められなかった。
33. 維持血液透析直後における姿勢変換時の心行動態に関する検討	共	2013年	大阪透析研究会誌 31:147-150	望月寿幸, 松尾善美, 森久賢一, 佐々木眞弓, 田端作好, 福田豊史, 矢嶋息吹 維持血液透析患者2名を対象に、血液透析直後に背臥位、長座位、椅子座位にて各5分間、心行動態を連続的に測定した。両症例ともに椅子座位へ姿勢変換後1分の収縮期血圧が最も低く、長座位から椅子座位への姿勢変換で、背臥位から長座位への姿勢変換時と同程度の有意な血圧低下が認められた。血液透析終了時、起立性低血圧予防のために段階的な離床を行う際には、長座位に加えて椅子座位で血圧を確認することが望ましいことが示唆された。
34. 維持血液透析患者に対する受動的下肢挙上の検討	共	2012年11月	健康運動科学 2:9-16	望月寿幸, 松尾善美, 浅沼芳則, 森久賢一, 八木賢、田端作好、山本則之、矢嶋息吹 血液透析施行中の透析患者では、受動的下肢挙上中に収縮期血圧の有意な上昇が生じ、受動的下肢挙上が透析中の血圧低下を軽減するのに有用である可能性が示唆された。受動的下肢挙上時の心行動態については心拍数、心拍出量、心係数の有意な低下があったが、全末梢血管抵抗が有意に高い傾向を示し、それが収縮期血圧上昇の一因であったと考えられる。
35. 超高齢透析患者の身体活動におよぼす心理的要因の影響に関する総合的調査	共	2012年09月	大阪透析研究会誌 30(2):145-149	望月寿幸, 松尾善美, 森久賢一, 佐々木眞弓, 田端作好, 福田豊史, 矢嶋息吹 歩行に介助不要な超高齢慢性維持透析患者5名(85.2±3.9歳)を対象に、身体活動量、透析間体重増加率、健康関連QOL、運動セルフエフィカシー、不安を調査し、さらに聞き取り調査を行って運動習慣や身体活動量に影響を与えた要因を分析した。身体活動量、自己管理能、運動セルフエフィカシーは高く、低不安で精神的健康が良好であった。活発な生活活動、定年後の仕事の継続、近親者の援助がその要因であったと考えられた。
36. Change in tongue morphology in response to expiratory resistance loading by magnetic resonance imaging	共	2012年06月	Journal of Physical Therapy Science 25:667-669	Yukio Yanagisawa, Yoshimi Matsuo, Hisato Shuntoh, Masaaki Mitamura, Noriaki Horiuchi The purpose of this study was to investigate the effect of expiratory resistance load on the tongue area encompassing the suprahyoid and genioglossus muscles. [Subjects] The subjects were 30 healthy individuals (15 males, 15 females, mean age: 28.9 years). Magnetic resonance imaging was used to investigate morphological changes in response to resistive expiratory pressure loading in the tongue area encompassing the suprahyoid and genioglossus muscles. Images were taken when water pressure was sustained at 0%, 10%, 30%, and 50% of maximum resistive expiratory pressure. We then measured tongue area using image analysis software, and morphological changes were analyzed using a repeated measures analysis of variance followed by post hoc comparisons. A significant change in the tongue area was detected in both sexes upon loading. Multiple comparison analysis revealed further significant differences in tongue area as well as a change

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
37. 兵庫県下における心臓リハビリテーションの現状と今後の課題	単	2012年06月	心臓リハビリテーション 17(2):228-232	<p>e in tongue area in response to the different expiratory pressures.</p> <p>高橋哲也、久保清景、藤田雅史、北井豪、谷口良司、民田浩一、本多祐、藤久和、松尾善美</p> <p>本研究の目的は、兵庫県下の心臓リハビリテーション実施施設にアンケート調査を行い、兵庫県下の心臓リハビリテーションの現状の把握と今後の課題について検討することである。2010年11月現在、兵庫県内で心臓リハビリを実施している18施設に対し、郵送法にてアンケート調査を行った。調査内容は病床数などの基礎情報、心大血管リハビリ施設基準の有無、実施の形態（外来・入院）、関わっている職種、対象患者、心臓リハビリの内容、施設の課題とした。回答があった施設は9施設で回収率は50%であった。兵庫県内で施設基準を取得している施設は、そのほとんどが県南部の人口が多い地域であった。医師、理学療法士、看護師以外の職種が心臓リハビリに関わっている施設は少なかった。栄養指導や服薬指導の実施に比べて、心理療法の実施は少なかった。理学療法士と看護師の連携をはじめとした院内の職種間連携強化に加えて、外来通院型心臓リハビリや維持期のリハビリなど病診連携を含めた地域での継続した取り組みを今後の課題とする病院が多かった。兵庫県下の心臓リハビリは実施施設がまだ少なく、施設内の実施内容の充実に加えて、地域連携の推進が今後の課題であると考えられた。</p>
38. 在宅要介護認定者の咳嗽能力に対する呼吸トレーニングの効果	共	2012年06月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 22(1):82-88	<p>柳澤幸夫、松尾善美、直江貢、中村武司、堀内宣昭</p> <p>要介護認定者の直接的な死亡原因は肺炎であり、中でも誤嚥性肺炎の予防は重要課題とされる。本研究では、在宅要介護認定者にホームトレーニングとしてEMTを実施し、EMT前後での呼吸機能・呼吸筋力・咳嗽能力を比較することによって、その効果を検討した。その結果、MEPとMIPは増加し、PEFとPCFも増加が認められた。したがって、EMTにてPCFが増加することで誤嚥性肺炎の発症を減少させる可能性があり、有用なホームトレーニングになり得ることが示唆された。</p>
39. パーキンソン病患者に対する呼吸筋トレーニングの効果～シングルケーススタディ～	共	2012年04月	日本摂食・嚥下リハビリテーション学会誌 16:75-80	<p>柳澤幸夫、松尾善美、春藤久人、直江貢、中村武司、堀内宣昭</p> <p>在宅療養中のパーキンソン病患者に対して、EMTを実施し、呼吸機能、咳嗽能力、呼吸筋力に加えて、口腔筋機能や質問紙を用いて摂食嚥下機能に関連する周辺症状に与える効果を明らかにすることを目的とした症例研究を実施した。</p> <p>症例は64歳の男性。診断名はパーキンソン病である。現在、T病院神経内科に通院し、介護保険サービスを利用し、在宅療養中である。Hoehn&amp;Yahr分類はstageⅢでBarthel Indexは65点である。研究計画はA-B-Aデザインとした。EMTはThreshold IMT (RESPIRONIC S社製)を用いて、トレーニング期間を4週間とした。EMTの負荷設定は最大呼吸筋力の30%とし、頻度は1日15分間2回とした。評価項目は、呼吸機能、咳嗽能力、呼吸筋力を測定した。また、口腔筋機能、摂食嚥下機能についての評価も実施した。EMT後に呼吸機能では最大呼气流速と咳嗽時最大呼气流速が増加した。呼吸筋力では、最大呼気筋力、最大吸気筋力が増加した。口腔筋機能ではRSSSTでは3から4に、口唇閉鎖力では、4.82Nから5.61Nに上昇した。摂食嚥下質問紙では、体重減少、嚥下困難感、むせ、口腔外流出の各項目に変化が認められた。したがって、EMTは単に呼吸筋力増強のみではなく、咳嗽能力を向上させ、摂食嚥下機能また口腔筋機能にも影響を与え、患者の致死的原因となる誤嚥性肺炎の予防につながる可能性が示唆された。今後、データを蓄積し、EMTが嚥下機能へ及ぼす影響について、さらなる検討をする必要があると考えられる。</p>
40. 心大血管リハビリテーションを地域で実施する循環器慢性期病院の役割	共	2012年03月	理学療法兵庫 17:28-31	<p>柳本智、野木佳男、松尾善美、千葉誠、上嶋健治</p> <p>対象は、心大血管リハビリテーションを実施した外来患者47名（男性22名、女性25）で平均年齢は71歳（37歳～90歳）、疾患の内訳は心不全27名、開心術後3名、心筋梗塞症6名、狭心症9名、解離性大動脈瘤2名であった。5年間に及ぶ外来心リハで実施患者に算定した単位数の推移と心リハ継続状況を確認した。心リハ単位数の推移は開始当初より症例数は順調に増加していったが20年度以降は減少に転じた。心リハの継続率は、平成18年6月から19年1月までの外来心リハ15例では継続率100%、平成18年6月から19年4月までの20例では継続率83%、平成18年6月から平成20年10月までの37例では70%と高い継続率となった。継続不能例は11例あり、その理由としては原疾</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
41. 上腹部外科術後における咳嗽介助が咳嗽能力および創部痛に及ぼす効果	共	2012年02月	理学療法科学 27(1):67-71	<p>患の増悪、病識の欠如と思われる外来心リハの拒否、他疾患の発症、経済的負担が困難の順となった。循環器疾患の急性期には対応しない循環器疾患慢性期病院でも、安全で継続率の高い外来心リハが可能であった。しかし、長期的に心リハ対象患者数を確保するためには急性期病院との連携が不可欠であった。</p> <p>柳澤幸夫、松尾善美、春藤久人、中村武司、片川 雅友、坂東 儀昭</p> <p>上腹部術後における咳嗽介助(AC)有無での咳嗽能力および創部痛への影響を比較し、その効果を明らかにすることとした。上腹部開腹手術を受けた24例とした。術前・術後1・3・5・7日目の計5回、肺活量(SVC)およびAC有無の咳嗽時最大呼気流速(PCF)と咳嗽時創部痛の程度を測定した術後のSVC、PCFは術後1日目に最も低下した。PCF回復率とSVC回復率で有意な正の相関が認められ、安静時創部痛と咳嗽時創部痛もPCF回復率と有意な負の相関が認められた。また、AC併用の効果はPCFの増加や創部痛の抑制を認め、術後5日までのAC併用は効果的であった。ACは咳嗽能力低下した患者や創部痛を有する患者に有用であると結論した。</p>
42. 間欠性跛行肢に対するバイパス術後、早期グラフト閉塞をきたした症例に対する監視下運動療法の効果	共	2012年	理学療法徳島 1:27-32	<p>高瀬広詩、中村武司、柳澤幸夫、出口憲市、前原裕衣、松尾善美、東根孝次、来島敦史</p> <p>34歳の男性。両側の間欠性跛行を認め、症状の強い右下肢に対して浅大腿動脈-前脛骨動脈バイパス術を施行したが、術後2日目にグラフト閉塞をきたした。術後早期から監視下運動療法を開始し、運動療法前後で血行動態、歩行能力、健康関連QOL(Health-related quality of life: HRQOL)の評価を行った。右下肢(手術側)では安静時の足首-上腕血圧比(ankle-brachial pressure index: ABI)に変化が認められなかったが、一定条件(12%勾配2.4km/時)に設定したトレッドミル上での40m歩行後のABI回復時間(Recovery time 40: RT40)は短縮した。左下肢(非手術側)では安静時のABI、RT40ともに改善を認めた。最大歩行距離は200mから1000m以上に改善した。HRQOL(SF-36)では「日常役割機能」、「社会生活機能」、「体の痛み」、「心の健康」の項目で改善が認められた。術後グラフト閉塞例に対する監視下運動療法は、肢機能を改善し、重症虚血肢を予防する有効な手段であると考えられた。バイパス術後早期グラフト閉塞例に対して、3ヵ月間の監視下運動療法を施行し、血行動態、歩行能力、HRQOLの改善を認めた。監視下運動療法はグラフト閉塞肢の予後を改善しうる有効な手段であることが示唆された。</p>
43. 化学性肺炎にて無気肺を呈し、呼吸リハビリテーションが有用であった1例	共	2012年	四国理学療法士会学会誌 34:121-122	<p>柳澤幸夫、松尾善美、中村武司、長谷加容子、堀内宣昭</p> <p>59歳男性。主訴：血痰、呼吸困難。既往歴：脳梗塞。現病歴：ボイラーの灯油を抜こうと短く切ったビニールホースを咥えて勢よく吸うことで、灯油の流れを引き出そうとした際に灯油を誤って誤飲した。入院時、意識は清明、呼吸困難感、少量の血痰を認めた。胸部画像では、右中葉に浸潤影を認めており、経過観察のために入院となった。入院後4日目に右肺野の浸潤影増悪傾向あり、酸素療法2L/min開始となる。入院後7日目には、胸部画像により右肺野の中葉及び下葉に無気肺を認めた。同日、呼吸リハビリテーションの依頼あり、無気肺の治療目的にてリハビリテーション介入となった。灯油誤嚥由来の化学性肺炎の呼吸管理については、さらなる悪化の可能性は否定できず、慎重に経過観察を行い、合併症の予防や合併症を併発した場合には早期の対応が重要であり、今回のMHなどを使用した呼吸リハビリテーションは治療として有用であった。</p>
44. 開心術前後における身体組成変動	共	2011年12月25日	健康運動科学2:83-89	<p>松尾善美、河村知範、西村真人、大久保祐介、古田宏、頓田 央、東上震一</p> <p>心臓血管外科手術前後の身体組成を測定し、退院までの身体組成の変化について調査することを目的として本研究を実施した。対象は、2010年11月より2011年1月に医療法人徳洲会岸和田徳洲会病院心臓血管外科で冠動脈バイパス術ないし弁置換術である期待的開心術を行い、同様の術後管理を受け、狭心症ないし弁膜症の診断を受けた患者17名(70.1±11.2歳、39-86歳、男性10名・女性7名)である。研究方法は、手術2-3日前(術前)、術後1週での胸腔ドレーン・尿管・尿管抜去後(術後)、退院前である術後2週(退院前)に体重測定、InBodyS20を用いた身体成分分析測定を夕食前かつ排泄後、運動前に安静臥床5分間経過後に仰臥位で実施した。標準プログラ</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
45. 心臓外科手術前後の運動アドヒアランス —退院後外来初診時までの変化—	共	2011年03月	神戸学院総合リハビリテーション研究	ムにおける術後200m歩行獲得に3日以上遅延した患者はいなかった。また、創部感染以外の術後合併症の発症は発生しなかった。体重とBMIは、術前および術後より退院前に有意に低値であった。体脂肪量には有意差がなかったが、除脂肪量、骨格筋量、体水分量、細胞内水分量、蛋白質量、体細胞量は術前に比して退院前に有意に低値であった。開心術患者では術後より退院前までに骨格筋量、蛋白質量が減少するため、術前より栄養介入を進め、退院前指導では身体組成、健康関連QOLも含め、継続した運動療法・栄養療法を立案・実施し、経過観察することが必要である。 松尾善美, 西村真人, 大久保裕介, 古田宏, 大瀧誠, 頓田央, 東上震一 心臓外科手術患者の身体活動量、運動セルフ・エフィカシー(ESE)、心理状態について、手術前後に差があるかを調査し、運動に対する行動変容が生じているかを検討した。術後に抑うつや不安、ESEをモニターした上で適切に介入し、運動を継続するという強い意志である運動アドヒアランスを向上させることが必要であることが示唆された。
46. 個別化教授システムを利用した授業の紹介	共	2011年03月	教育開発センタージャーナル	松尾善美, 小形晶子 統計学の基本的理解を進めやすくするためにハンバーガー統計学を使用している。ハンバーガー統計学は、Web上で公開されており、個別化教授システム方式の授業で使えるよう開発されたものである。個別化教授システムも含めた学生の授業評価では、数字が苦手な学生にも理解がしやすく、予習・復習も行いやすいので好評であった。一方、教員側はe-learningシステムとも連携した教材を準備する必要がある。
47. 血液透析中に行う運動療法	共	2010年12月	臨床運動療法研究会誌	望月寿幸, 松尾善美, 森久賢一, 八尾隆治, 福田豊史, 田端作好, 山本則之, 矢嶋息吹 血液透析患者の運動療法実施にあたっては低いコンプライアンスが問題となっている。その問題を解決する手段として、透析実施中の運動療法が近年注目されている。透析時間を使って実施するため、継続が容易であること、スタッフの監視下で行えるため、リスク管理が十分できること、さらに透析中の血圧低下を軽減することなどが報告されている。透析施行中の下肢エルゴメータによる運動療法を2例経験したので紹介する。
48. 血液透析患者に対する運動療法介入研究のレビュー	共	2010年06月	総合リハビリテーション	望月寿幸, 松尾善美, 森久賢一, 福田豊史, 田端作好, 山本則之, 矢嶋息吹 血液透析患者は骨・関節疾患を含む多くの合併症によってQOLの低下をきたすことが多く、その対策は重要である。原著論文で報告された運動療法の身体機能に関するアウトカムの整理、統合を行った。身体機能を指標とした運動療法介入試験を報告した原著論文は33編であった。最高酸素摂取量をはじめとする運動耐容能、歩行速度や連続立ち座り時間などの動作能力の改善が多く原著論文で報告されていた。
49. 重度脳性麻痺児・者の呼吸障害とその理学療法	共	2010年03月	神戸学院総合リハビリテーション研究	山川友康, 松尾善美, 南哲 重度脳性麻痺児・者の死因で肺炎が最も多く、重症児の死亡を減らすには呼吸器感染症、特に肺炎に対する対策が最も重要になる。重症児の呼吸障害は、誤嚥や胃食道逆流症など消化器系器官に影響を及ぼす。また、睡眠時呼吸障害などを誘発すると、全身状態がさらに悪化する。重度脳性麻痺に対する呼吸障害に対するアプローチでは、その症状を精細に評価して、それらの問題に適切な対応を実施する必要がある。
50. パーキンソン病患者における運動リズムと運動イメージ	共	2010年03月	神戸学院総合リハビリテーション研究	松尾善美, 山本静香, 内田豊, 木谷文哉, 小形晶子, 森川孝子, 鎌田理之, 高島千敬, 北村重和, 阿部和夫 運動イメージにおける運動周期差を従属変数、下肢運動周期差を独立変数とした回帰分析にて、健康者、患者ともに決定係数が1に近い2次回帰曲線が得られた。自動的な運動パターンに対する上位の中枢神経系からの制御は、パーキンソン病患者で実際の運動によってのみ学習可能であるだけでなく、運動を想起することによっても学習可能であることが示唆された。
51. 肺音解析システムを用いた重症心身障害者の呼吸音響解析	共	2009年12月	日本重症心身障害者学会誌	南哲, 山川友康, 松尾善美 肺音解析システムを用いた音響解析は呼吸状態の経時的変化や気道閉塞時などの呼吸音の特徴を視覚的かつ非侵襲的に捉えることができ、日常における重症児(者)の呼吸状態の評価に役立つ可能性が示された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
52. 理学療法士教育および専門職としての世界的現状	単	2009年12月	近畿理学療法学会誌	世界40カ国の理学療法士協会を対象とした調査では、ほとんどの国で資格認定制度と教育認可制度を有していた。70%で理学療法の専門領域認定を有していた。養成校の認可再認可の頻度は、開設時のみを除いた60%の国では、政府ないし理学療法士協会による定期的再認可を必要としており、教育の質について保証する制度が整備されていた。各疾患領域がバランスのとれた理学療法教育を進展させることが望ましい。
53. Right prefrontal cortex is activated for perceiving postural limits: A functional near-infrared spectroscopy study	共	2009年12月	Health	Noriyuki Kamata, Yoshimi Matsuo, Ayako Matsuya, Satoru Inoue, Kazuo Abe 転倒と関連のあるリーチ到達可能性知覚時の脳活動をNIRSを用いて調査した。結果、前頭前野の有意な活動増加を認めた。転倒予防には、前頭前野の賦活が有用かもしれない。
54. 呼吸・循環器疾患へのベッドサイドからの作業療法	共	2009年06月	作業療法ジャーナル	高島千敬, 井上悟, 松尾善美 呼吸器・循環器疾患に対するベッドサイドの作業療法の目標、呼吸器疾患に対する作業療法評価・介入のポイント、循環器疾患に対する作業療法評価・介入のポイント、作業療法の診療報酬上の問題について解説した。
55. 心大血管疾患術後の作業療法実践	共	2009年06月	作業療法ジャーナル	濱田祐子, 高島千敬, 井上悟, 松尾善美 心臓術後の自宅退院、復職に向けての支援を行った事例を報告した。運動強度の強い活動に関しては、実際の活動場面でバイタルサインや自覚症状に注意を払いながら評価や問題技能への動作トレーニングを実施することにより、息切れ感を認めていた活動が一部容易に遂行可能となり、退院後の生活を再構築する一助となった。他職種と連携しながら作業療法を実施することで、対象者の社会復帰への役割を担うことができる。
56. パーキンソン病患者における方向転換時バランス保持の重要性 -転倒予防に向けて-	共	2009年03月	甲南女子大学研究紀要	鎌田理之, 松尾善美, 橋田剛一, 加藤直樹, 井上悟, 須貝文宣, 阿部和夫 パーキンソン病 (PD) の中等症までのPD患者のバランス能力に着目し、その障害の特徴と早期介入の必要性について検討した。バランス能力の調査にはBerg Balance Scaleを用いた。中等症までのPD患者では、姿勢反射障害に加え、機能的バランス能力が低下していくことが分かった。さらに、初期PD患者のバランス障害は方向転換課題でより強調されることも示された。PD患者の転倒はMHYの2、3の時期に最も多かった。
57. 人工心肺装置の使用の有無により冠動脈バイパス術後症例の術後歩行獲得期間は影響されるか	共	2009年02月	心臓リハビリテーション	西村真人, 松尾善美, 大久保裕介, 桑原晶子, 東上震一, 関井浩義, 頓田央, 乃田浩光, 東修平, 藤岡成年, 下村裕 冠動脈バイパス術 (CABG) における人工心肺装置 (CPB) の使用の有無による歩行獲得期間の検討と獲得を遅延させる因子について検討した。off-pump CABGでは術後歩行獲得期間や入院期間に差を認めず、高齢者や低左室機能症例の術後歩行獲得期間は歩行獲得期間に影響を及ぼす因子にならなかった。歩行獲得の直接的遅延理由は、頻脈性不整脈、気胸、術後せん妄、透析後易疲労であった。
58. 肺腫瘍に対する肺葉切除後の胸腹壁運動の変化	共	2008年12月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌	本田憲胤, 前田和成, 澤田優子, 西野仁, 原聡, 廣畑健, Maria Ragnardottir, 松尾善美, 福田寛二 本研究の目的は、肺腫瘍患者に対する肺葉切除術が胸腹壁運動に与える影響を明らかにすることである。肺葉切除術を行った18例の男性を対象とし、Respiratory Movement Measuring Instrumentを用いて胸腹壁運動を測定した。結果は、術前に対し術後1週、術後1ヶ月ともに胸腹壁運動は有意に低下していた。術後の胸腹壁運動の有意な低下は非術側でもみられた。今後、胸腹壁運動の長期的な変化、術式による影響を検討していく。
59. 心臓外科手術後男性患者の身体活動量と心理状態、健康関連QOL	共	2008年12月	臨床運動療法研究会誌	松尾善美, 西村真人, 大久保裕介, 山本健史, 東上震一, 頓田央, 乃田浩光, 豊住明子, 桑原晶子 男性患者の心臓外科後の活動性は、術前の心理状態と関連し、高活動者と低活動者の術前心理状態には相違点があり、高活動者は術前に陰性感情が高かった。心臓外科における術前から術後までの一貫した継続的なりハビリテーション介入の必要性が示唆された。
60. 透析患者に対する理学療法に関する検討	共	2008年09月	大阪透析研究会誌	望月寿幸, 松尾善美, 上田愛, 福田豊史, 田端作好, 山本則之, 矢嶋息吹 透析患者の身体機能の向上、QOL改善のために臨床応用すべく、透析患者に対する理学療法に関する報告を文献的に調査、検討した。週3回の筋力トレーニング、有酸素トレーニングによって筋力、運動機能、運動耐容、QOLスコアの有意な改善、透析効率、代

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
61. Educational and professional Issues in physical therapy-An international study	共	2008年09月	Physiotherapy Theory and Practice	謝への好影響が報告されていた。理学療法は透析患者の身体機能、運動耐容能、QOLを改善していたが、RCTがさらに必要と考えられた。 Lawrence P. Cahalin, Yoshimi Matsuo, Sean M. Collins, Ayako Matsuya, Francis Caro 40カ国の理学療法士 (PT) 協会PT教育課程の認可制度、PTの資格取得制度、PT専門分野の認可制度、理学療法士の所得関連事項の4カテゴリーのオリジナルアンケートによる調査を世界で初めて行い、理学療法の教育および専門職としての現状は、認可課程や資格取得、専門分野の確立について共通点が多かった。
62. 妊婦の腰痛に関連する新しい指標～妊娠後期における前顔面の姿勢と筋硬度の変化～	共	2008年03月	甲南女子大学研究紀要看護学・リハビリテーション学編	松谷綾子, 左右田裕生, 松尾善美, 関 啓子 前顔面の姿勢変化と腰部筋の筋硬度の経時的変化と腰痛との関係を明らかにすることを目的とした。妊娠34週時において(1) 腰痛の罹患率 (87.5%) と腰痛の強さ (中等度) は先行研究と同様であり、36週まで持続すること、(2) 非妊婦者よりも上前腸骨棘間距離、後上腸骨棘の傾き、立位姿勢時でのL3の脊柱起立筋の筋硬度が増すこと、(3) 体幹傾きと側臥位でのL3右外側筋硬度が高い程、痛みが強いことが分かった。
63. 心臓血管外科後3ヶ月での心理状態、健康関連QOL、運動習慣における性差	共	2008年01月	心臓リハビリテーション	松尾善美, 西村真人, 大久保裕介, 桑原晶子, 東上震一, 頓田 央, 乃田浩光, 畔柳智司, 下村 裕 心臓血管外科後3ヶ月の心理状態、HRQOL、運動習慣における性差を後向きに検討した。心臓血管外科後、女性は男性よりも身体的制限を感じており、維持期リハビリテーション介入上考慮する必要がある。術後3ヶ月において運動習慣に差があり、女性の運動に対するコンプライアンスを改善させる介入が必要である。
64. 循環器疾患に対する理学療法士教育の日米比較	共	2008年01月	心臓リハビリテーション	松尾善美, Lawrence Cahalin, Sean Collins, 松谷綾子, 浅井 剛, 山本大誠, 奈良 勲, Francis Caro 循環器理学療法教育の日米比較において、日米の循環器理学療法教育の相違点が初めて明らかになった。社会的ニーズの高まっている心臓リハビリテーションの普及・啓発のためにも、我が国の循環器理学療法士教育を改善する必要性が示唆された。理学療法教育の内容を向上させるために、日米の協力関係を結んでいくことが今後必要である。
65. Assessment of Motor and Process Skillsの応用	共	2007年11月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌	高島千敬, 松尾善美, 井上悟, 齋藤さわ子, 南正人, 松田暉 Assessment of Motor and Process Skillsを用いることで、介入の手がかりとなる作業遂行の質を評価するはもとより、介入の有用性の判定が可能となる。
66. 視覚フィードバックプログラムによるパーキンソン病患者の下肢間協調性改善	共	2007年11月	神戸学院総合リハビリテーション研究	松尾善美, 鎌田理之, 松谷綾子, 橋田剛一, 山本大誠, 平岡浩一, 井上 悟, 奈良 勲, 阿部和夫 視覚フィードバックによる協調運動の改善と下肢機能の関連を筋電図学的に明らかにするために、パーキンソン病患者と健康者に対して、左右独立駆動型エルゴメータによるペダリング運動をリアルタイムでの視覚フィードバック用いた協調性トレーニングを実施した。このトレーニングにより、パーキンソン病患者では非優位側下肢でペダリング運動のタイミングを改善することで運動パターンを正常化することができた。
67. 生活習慣病と健康体操	単	2007年06月	明石市医師会ジャーナル	メタボリックシンドロームは、内臓脂肪型肥満を共通の要因とした高血糖、脂質異常、高血圧を呈する病態であり、それらが重複した場合は虚血性心疾患、脳血管疾患等の発症リスクが大きくなる。運動習慣の徹底や食生活の改善など生活習慣の改善により内臓脂肪を減少させ、それらが発症する危険性を減らすことが大切である。今後の生活習慣病対策においては「1に運動、2に食事、しっかりと禁煙、最後にクスリ」の標語が決められている。
68. Overestimation of stability limits lead high frequency of fall in Parkinson's disease	共	2007年06月	Clinical Rehabilitation	Noriyuki Kamata, Yoshimi Matsuo, Toshiyuki Yoneda, Hideki Shinohara, Satoru Inoue, Kazuo Abe パーキンソン病 (PD) 患者は疾病の進行とともに安定性限界を誤認することが示唆された。PD患者は重心が安定性限界を越えたとき、反射欠如のために姿勢を修正させるのが困難である。これは、転倒を助長する可能性がある。
69. 呼吸リハビリテーションとEBM	単	2007年04月	MB Medical Rehabilitation	慢性閉塞性肺疾患の国際ガイドラインより、呼吸リハビリテーションの構成要素、推奨項目と効果、実施ガイドライン、運動療法後の改善機構等の世界的な動向について解説した。呼吸リハビリテーションは、症状を有し、日常生活活動が減少した慢性呼吸

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
70. 診療報酬と施設基準	単	2007年04月	MB Medical Rehabilitation	器疾患患者のために根拠に基づいた多職種による包括的介入であり、患者の治療を集約することで、全身の症状発現を安定化ないしは回復させて、症状を緩和し、機能的状況を最適化する。 「呼吸器リハビリテーション料」がこの新設され、施設基準、算定料、算定期間が定められ、算定対象は、急性発症した呼吸器疾患の患者、呼吸器手術後等の患者、慢性の呼吸器疾患で一定程度以上の重症の呼吸困難や日常生活能力の低下を来している患者と定められた。算定期間は治療開始日から90日以内である。現行制度は、安価な算定料のみならず、施設基準、算定期間などについて問題点を残すと思われる。
71. 運動療法強度が前頭前野の血液動態に及ぼす影響	共	2007年03月	神戸学院総合リハビリテーション研究	松尾善美, 春藤久人, 中前智通, 森川孝子, 山本大誠 運動療法の強度が前頭前野の血液動態に及ぼす影響についてATを境にどのように変動するかについて検討することを目的とした。AT到達時VO <sub>2</sub> , VO <sub>2</sub> /ΔWR, HR, VO <sub>2</sub> /HRはヘモグロビン量の両側・一側増加、減少の3群間で有意差がなかった。判断や意思決定に関与する統合中枢である前頭前野は、ATから75%運動強度までは漸増運動時に賦活されることが示唆された。
72. 身体運動が認知機能および脳の神経活動に及ぼす影響	共	2007年03月	神戸学院総合リハビリテーション研究	山本大誠, 奈良 勲, 春藤久人, 松尾善美, 中前智通, 森川孝子 脳の神経活動は運動後の左運動前頭前野において活性化が認められた。身体運動が認知機能および脳神経活動に影響を及ぼす可能性が示唆された。
73. 記憶課題による脳賦活効果の検討—近赤外分光法 (NIRS) を用いた研究—	共	2007年03月	神戸学院総合リハビリテーション研究	中前智通, 篠原英記, 松尾善美, 森川孝子, 山本大誠, 大瀧 誠, 梶田博之 認知症高齢者への作業療法援助・介入では、混乱や不安になることを避けるため、対象者が習熟している作業活動を利用することが多い。太田らの開発した記憶検査法と光トポグラフィー装置を用いて、頭在記憶、潜在記憶課題遂行中の脳血液動態を比較し、その賦活効果について検討した。左側頭前頭前野において浅在記憶課題遂行時に比し、頭在記憶課題遂行時の脳血液量の方が有意に高い変化を示した。
74. 近赤外分光法を用いた書字課題における脳血液動態の検討	共	2007年03月	神戸学院総合リハビリテーション研究	森川孝子, 篠原英記, 松尾善美, 中前智通, 山本大誠, 大瀧 誠, 梶田 博 硬筆書写課題の対照課題である図形描画課題遂行中の酸化ヘモグロビンの変化量との間に有意な差がみられなかったが、どちらの課題遂行中においても前頭前野の酸化ヘモグロビン量が増加した対象者は18名中12名であった。よって、硬筆書写活動と図形描画において前頭前野が賦活された可能性が示唆された。
75. 弁膜症患者の術後離床に年代は影響しない	共	2007年01月	心臓リハビリテーション	桑原晶子, 西村真人, 松尾善美, 大久保裕介, 東上震一, 森 俊文, 頓田 央, 乃田浩光, 畔柳智司, 下村 裕 弁膜症患者に対して、術第2病日より歩行を開始し、術第5病日には病棟歩行(200m)獲得を目標とする離床プログラムを用いており、年代別に患者背景・術前データ・手術データと術後離床の遅延理由について調査検討した。年代が離床に影響していないことが判明し、年代を越えて頻拍性不整脈が病棟歩行獲得に影響を及ぼしていた。高齢者であるからといって、必ずしも離床プログラムが遅延するとは限らないことが示唆された。
76. 心臓血管外科術前後の活動性と健康関連QOLの関連性	共	2007年01月	神戸学院総合リハビリテーション研究	松尾善美, 西村真人, 大久保裕介, 下村 裕, 桑原晶子, 東上震一, 森 俊文, 頓田 央, 乃田浩光, 畔柳智司 心臓血管外科術前の健康関連QOLと術前・術後第1週における活動量との間に関連があるかを検討した。術後第1週の活動性は術前を反映しており、術前の全体的健康感が低いと運動量の術後改善率は高いことが示唆された。今後、急増および高齢化している心臓血管外科対象患者に対する運動療法、栄養療法、HRQOL、心理面も含めた総合的な術前後プログラムを開発するためにさらに研究を進めることが必要である。
77. 運動イメージングと脳の神経活動—脳機能画像計測装置を用いた予備的研究—	共	2007年01月	神戸学院総合リハビリテーション研究	山本大誠, 奈良 勲, 春藤久人, 松尾善美, 中前智通, 森川孝子 本研究は、運動イメージングによる脳の神経活動に関する予備的研究を行い、光トポグラフィー装置を用いた脳機能画像計測による信号の意味の理解に寄与する基礎資料とすることを目的とした。各上肢の運動イメージングにおける左右の前頭葉の血液動態に有意な差は認められなかった。研究実施計画の妥当性および脳機能画像計測装置から得られる信号の意味の理解について今後の課題が提起された。



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
78. 施設利用高齢者に対するバランス トレーニングの取り組み	共	2006年06月	保健の科学	山本大誠, 備酒伸彦, 松尾善美, 浅井 剛, 篠原英記, 竹内さおり, 前田峰子 高齢者の平衡機能の低下が転倒を引き起こす可能性があることから、高齢者の平衡機能に着目した。施設入所の高齢者25例を無作為にトレーニング介入群と非介入群に分けて、平衡機能に対するバランストレーニングの影響について検討した。バランストレーニング介入後における介入群と非介入群の比較は、年齢を共変量とした二元配置分散分析を行った。重心動揺計検査の矩形面積において期間を主効果とした有意差を認めた。
79. 理学療法士による冠動脈バイパス 術後の早期重点的介入効果	共	2006年06月	心臓リハビリテーシ ョン	西村真人, 谷野晶子, 松尾善美, 鎌田理之, 東上震一, 森俊文, 頼田 央, 乃田浩光, 畔柳智司, 下村 裕 冠動脈バイパス術後症例に術翌日から専任の理学療法士が介入し、早期歩行を行い良好な結果を得たので報告した。理学療法士が明確な基準に基づきリスクを踏まえ術後早期に重点的に介入することは、離床を促進すると考えられ、結果的に入院期間を5.0日短縮し、短縮した期間分の医療費を削減した。理学療法士の術後早期重点的介入は、入院期間を短縮し術後医療費を削減した。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. 慢性腎臓病の理学療法	単	2018年06月3 0日	第30回兵庫県理学療法 学術大会 (神戸)	慢性腎臓病の運動療法について解説した。
2. 高齢心不全患者の評価と対応	単	2017年10月1 9日	リハビリテーション・ ケア合同研究会久留 米2017 (久留米)	現在、100万人規模とされる我が国の高齢者に多い慢性心不全は、患者数が今後急速に増加し、心不全パデミックを引き起こすとされている。本症は、コモン・ティジェズ (ありきたりの病気) で急性増悪による再入院を繰り返し、根治が望めない進行性かつ致死性の悪性疾患であり、その大半が心疾患以外の併存症を有している。そのため、医療・介護スタッフによる多職種での施設や地域での管理・支援体制が患者の抱える医学的・社会的問題に対し、重要な役割を果たすことに他ならない。したがって、心不全に対する基本的知識に基づく評価と対応が不可欠になっている。本講演では、基本的な心不全の理解から評価、およびリスクの発見とそれらに対する対応について解説する。さまざまな問題を抱える心不全患者に対するリハビリテーションとケアが生活の質と生活の場に軸を置いた慢性管理が実現することを期待したい。
3. パーキンソン病のリハビリテーシ ョン 一理学療法士の立場から	単	2017年03月1 1日	第14回阪神内部障害リ ハビリテーション研究 会 (神戸)	パーキンソン病のリハビリテーションは過去15年で各々の臨床研究を統合したメタアナリシスなどの解析が進み、介入効果についての知見が発表され、薬物療法で病態を制御しながら、理学療法を実施することは不可欠であると位置付けられるようになってきている。理学療法では、重症度に応じた適切な介入を行い、また家屋改造に対する具体的提案を行う。特に、患者個々に適した外的キューを探し、日常生活に応用できるよう工夫することは重要である。さらに、改善するアウトカム指標も明白に示されている。しかし、即時効果は確認されているが、長期のフォローアップ効果についてはまだ不明である。また、近年パーキンソン病患者の身体活動は神経保護などの観点から重要であることが多くの論文で指摘され、疾病の進行にも関わると言われているが、身体活動を増加すると一方で転倒が増加するリスクもあり、安全性を担保した上での身体活動性の改善が推奨される。
4. 心リハにおける骨格筋のとらえ方	単	2017年02月2 5日	日本心臓リハビリテー ション学会第2回近畿地 方会教 (大阪) 育講演	心不全患者では、運動耐容能の低下に伴い、日常生活活動性ならびにQOLは低下する。これらは、心不全の重症度や生命予後と関連している。また、低栄養、全身性炎症、内分泌のインバランス、酸化ストレスによりエネルギー代謝異常、type I からtype II への筋線維変換、ミトコンドリア異常、筋力低下、筋萎縮といった骨格筋異常を引き起こしている。高齢心不全患者の病態と予後を把握するには、栄養状態、筋量低下に伴うサルコペニア、脆弱性を表すフレイルについて臨床的かつ社会的特徴を理解し、それらの総合的な把握・評価が重要であるとされている。このように、心リハにおける骨格筋は重要な治療対象であるが、未だ判定基準や標準的治療介入についてはその詳細が示されておらず、今後重症度別の治療指針が示されることが必要であろう。
5. 呼吸リハビリテーション技術	共	2016年06月1 1日	第53回日本リハビリテ ーション医学会学術集 会 (京都)	医師、コメディカルスタッフにハンズオンセミナーで呼吸リハビリテーションの技術講習を実施した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
6. 呼吸リハビリテーション機器	共	2016年06月1 1日	第53回日本リハビリテ ーション医学会学術集 会（京都）	医師、コメディカルスタッフにハンズオンセミナー で呼吸リハビリテーション機器についてのセミナー を実施した。
7. The future of respiratory muscle training in health and disease	共	2015年05月0 5日	World Confederation f or Physical Therapy 2 015 (Singapore), post -congress course	米国、オーストラリア、ブラジルの講師とともに呼 吸筋トレーニングの未来について講演した。
<b>2. 学会発表</b>				
1. 虚血性心疾患発症リスクの提示により運動の動機付けを向上させる取り組み	共	2020年07月1 8, 19日	第26回日本心臓リハビ リテーション学会（福 岡）	渡邊允雄、松尾善美 発症リスク提示が運動の動機付けへ影響するか考察 する。対象は2名。症例A（68歳、不安定狭心症）は 大阪がん循環器病予防センターの北村らにより開発 された循環器疾患・発症予測ツールを用い、症例B（ 75歳、急性心筋梗塞症）は日本循環器学会の心筋梗 塞二次予防に関するガイドラインより発症リスクを 用い説明した。運動に対する動機付け評価としてBeh avioral Regulation In Exercise Questionnaire-2 （BREQ-2）を用いた。症例Aでは内発的調整が増加し 、症例Bは低下した。両症例とも1カ月後の評価で外 的調整も増加した。
2. 運動耐容能を予測する骨格筋評価指標の検討	共	2020年02月1 5日	第5回日本心臓リハビ リテーション学会近畿支 部地方会（大阪）	神田龍馬、鎌田理之、松本ゆかり、牧成美、松尾善 美、橋田剛一、中本敬、大谷朋仁、坂田泰史 他の骨格筋指標と比較して補正筋輝度が運動耐容能 とより強い相関関係を示すかを検討した。対象は健常 者29名（27.9±3.7歳、男性12名）。超音波エコーで上 前腸骨棘と膝蓋骨上縁の中間点で大腿直筋の筋厚と 皮下脂肪厚、筋輝度を測定後、補正筋輝度を算出した 。筋厚、補正筋輝度および等尺性膝伸展筋力の各骨 格筋指標と、心肺運動負荷試験で測定した運動耐容 能との相関関係を検討した。健常者において、補正筋 輝度や筋厚は等尺性膝伸展筋力より運動耐容能を予 測する骨格筋指標として有用な可能性が示された。
3. 植込型補助人工心臓装着患者の術前MSが術後運動耐容能に与える影響	共	2020年02月1 5日	第5回日本心臓リハビ リテーション学会近畿支 部地方会（大阪）	松本ゆかり、鎌田理之、神田龍馬、牧成美、松尾善 美、橋田剛一、中本敬、大谷朋仁、坂田泰史、澤芳 樹 重症心不全患者では下肢筋力（MS）が低下しているが 、iVAD装着患者において術前のMSが術後の運動耐容 能に与える影響は明らかでない。今回iVAD装着患者 の術前MSが術後運動耐容能に与える影響を調査した 。対象は当院で2015年5月から2019年8月にiVAD装着 術前後で心臓リハビリ（CR）を施行した22例であり、 それらを術前MS低値（0.41±0.11kgf/kg）・高値群（0. 72±0.07kgf/kg）の2群に分け、術後のMSの推移、運 動耐容能を後方視的に比較検討した。iVAD装着患者 において術前MSは術後のCRによる運動耐容能の改善 に影響を及ぼす可能性が考えられた。
4. 地域在住高齢透析患者の歩行速度、筋力及び筋量が生活活動範囲に与える影響に関する検討	共	2020年02月2 2, 23日	第10回日本腎臓リハビ リテーション学会（東 京）	望月寿幸、松尾善美、石丸達人、森久賢一、佐々木 真弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹 地域在住の高齢維持血液透析（透析）患者の歩行速度 、筋力及び筋量が活動範囲に与える影響に関して調 査すること。対象は65歳以上の地域在住透析患者86 名である。握力と膝伸展筋力、歩行速度を測定し、 活動範囲の指標としてlife space assessment（LSA ）、筋量の指標として血清クレアチニン（Cr）と大 腰筋指数を調査した。さらに臨床的背景因子と併せ て、糖尿病（DM）群と非DM群の比較及びそれぞれの 群におけるLSAスコアとの関係に関する解析を行った 。膝伸展筋力、歩行速度、Crは、DM群が非DM群より も有意な低値を示した。重回帰分析では、DM群で膝 伸展筋力と歩行速度、非DM群では膝伸展筋力がLSAス コアの独立した規定因子であった。65歳以上の地域 在住透析患者において、DMがあると筋量及び筋力が 低く、筋力が強く歩行速度が速いほど活動範囲が広 かった。
5. 脳死片肺移植後の離床開始時に右大腿骨頸部骨折を来した症例の理学療法の経験	共	2020年01月2 5日	第36回日本肺および心 肺移植研究会（大阪）	木原一晃、南正人、鎌田理之、奥結季恵、橋田剛一、 松尾善美、濱田英敏、平田陽彦、大瀬尚子、舟木壮 一郎、新谷康 脳死片肺移植後に右大腿骨頸部骨折を来した症例を 経験した。X-2年2月特発性間質性肺炎と診断。ステ ロイド投与開始。X-1年9月肺移植待機登録。以後間 質性肺炎急性増悪にて入退院を繰返、X年9月の腰椎 圧迫骨折後はベッド上安静であった。X年12月脳死右 片肺移植術施行。移植16日の介助立位練習時に右股 関節痛が出現。右大腿骨頸部骨折と診断され、観血 的整復固定術施行。移植8か月で立位・歩行練習を平 行棒内両手支持下で開始した。移植14か月で棟内歩 行器歩行自立。移植15か月で6分間歩行距離が130mと なり、他院転院、その2か月後に自宅退院となった。 本例は長期間のステロイド投与、疾病の増悪による

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
6. ベルト式電気刺激における刺激肢位の違いが刺激出力および酸素摂取量に及ぼす影響	共	2019年11月23, 24日	第48回四国理学療法士学会（松山）	<p>継続的床上安静を背景としているが、移植後には十分な注意が必要と考えられ、慎重に管理された理学療法によって回復が期待できると考えられた。</p> <p>柳澤幸夫、松尾善美 異なる刺激肢位において耐えうる刺激出力レベルや刺激による酸素摂取量の違いについて検証し、効果的な刺激肢位を明らかにすることを目的とした。対象は健康大学生10名とした。刺激にはベルト電極式骨格筋電気刺激装置を使用した。刺激方法は腰部と大腿部および足部にベルト電極を装着し、同時収縮させた。刺激肢位はtilt tableを使用し、傾斜角を0度、30度、80度の3肢位に加え、立位姿勢を含めた4肢位とした。測定項目は電気刺激中における耐えうる最大実効電流ならびに呼気ガス装置を用いて酸素摂取量を計測した。電気刺激での刺激肢位では傾斜度80度または立位姿勢が刺激出力を高く設定でき、酸素消費量も高いことが明らかとなった。</p>
7. The effect of expiratory muscle strength training for elderly patients under long-term care	共	2019年10月24-27日	The 11th IAGG Asia / Oceania Regional Congress 2019	<p>Yoshimi Matsuo, Yukio Yanagisawa, Eiji Fukuike This expiratory training program was well-tolerated and led to improvements in tongue pressure, respiratory function and pressure in elderly patients under long-term care.</p>
8. 心臓外科手術後患者における積極的早期離床は術後身体運動機能の低下を予防するか？—傾向スコアを用いた検討—	共	2019年09月14日	第4回日本心管理理学療法学会（沖縄）	<p>河村知範、居村修司、今井良英、坂下浄、中野裕葵、堀雄介、古田宏、松尾善美 本研究の目的は、心臓外科手術後の積極的早期リハビリテーション進行が術後身体運動機能低下を抑制するか検討することとした。対象は当院心臓血管外科で待機的に開胸心臓手術を施行した563名とした。術後身体運動機能低下は、退院時SPBP点数が術前と比べて1点以上低下した場合と定義した。早期離床群（200m歩行獲得日数3日以内）と通常離床群（200m歩行獲得日数4日以上）とで220名（110ペア）をマッチングした。キャリパーは0.05を用いた。傾向スコアでマッチング後の二群間で術後身体運動機能低下の割合について比較した。心臓手術後経過が順調な症例に関して、術後3日以内に200m歩行を獲得する早期離床プログラムのみでは術後身体運動機能低下を抑制することは困難であることが示唆された。</p>
9. 肺癌術後肺合併症の予測因子としての術前Cough peak flowの有用性	共	2019年08月3, 4日	第41回日本呼吸療法医学会学術集会（大阪）	<p>木原一晃、鎌田理之、古川啓介、武田匠平、松尾善美、橋田剛一、大瀬尚子、平田陽彦、瀬尾恵子、武田吉人、新谷康 肺癌手術患者の術前最大呼気流量（CPF）が術後肺合併症と関連するかを検討した。当院呼吸器センターで肺癌手術を行い、術前CPFを評価し得た98例のうち、術中に気管切開やミニトラック留置を施行された例、胸壁血管切除例を除いた85例を対象とした。年齢等の背景因子、CPFや呼吸機能、歩行状態等の術前因子、術式や手術時間等の術中因子と術後肺合併症の有無を後方視的に調査した。対象を肺合併症群、非合併症群の2群に分類し、解析した。さらに、CPFによる術後肺合併症併発に関するROC曲線を求め、カットオフ値を算出した。肺癌手術患者では、術前呼吸機能よりも術前CPFがより術後肺合併症併発に関連し、310L/minが術後肺合併症の予測に有用な可能性が示唆された。</p>
10. TAVIにおける心リハ介入のポイントと予後改善に対する役割	共	2019年07月13, 14日	第25回日本心臓リハビリテーション学術集会（大阪）シンポジウム指定演題：経カテーテル的弁膜症治療における心リハ	<p>高瀬広詩、松尾善美、村上直也、川島輝枝、泉智子、小倉理代、元木達夫、福村好晃、細川忍 TAVIは低侵襲治療であるが、対象者が高齢かつフレイルの高い症例であるため、術後は開心術後と同等に綿密な管理が必要とされる。先行研究ではTAVI後2~3割の症例に術後せん妄や身体機能低下を認め、これらがADLの低下や自宅復帰率の低下、再入院率の増加などに繋がっていると報告されている。これらの合併症予防のためには早期離床や早期のライン類抜去などが重要であり、当院で実践している取り組みとその効果について紹介する。また、TAVI後は心不全再入院が多いことも報告されており、長期予後改善に向けて疾病管理を含む包括的心臓リハビリテーションプログラム（以下、心リハ）の役割が期待される。TAVI後に心リハを実施し、運動耐容能が向上したという報告は散見されるものの、長期予後改善を示した報告はまだまだ存在せず、今後の課題である。</p>
11. Determinants of tongue thickness and tongue pressure in elderly patients under long-term care	共	2019年06月9-13日	13th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress (ISPRM 2019, Kobe, Japan)	<p>Yoshimi Matsuo, Yukio Yanagisawa, Eiji Fukuike The purpose of this study is to determine factors of tongue thickness and tongue pressure in elderly patients under long-term care. The tongue thickness and tongue pressure in elderly patients under long-term care were measured.</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
12. 心臓血管外科術後のリハビリテーション進行と術後身体運動機能の関連について	共	2019年03月29-31日	n) 第83回日本循環器学会学術集会（横浜）	ents under long-term care were affected by LCF and inspiratory muscle strength. It was suggested that LCF is closely related to tongue thickness and tongue pressure. 河村知範、永井佑典、古田宏、今井良英、坂下浄、中野裕葵、居村修司、薦岡成年、松尾善美、磯博康 本研究は、身体運動機能低下を抑制する心臓血管外科術後のリハビリテーション進行のカットオフ値の算出を目的とした。対象は2014年1月から2018年6月までに当院にて待機的に心臓血管外科手術を施行され、術前に200m歩行が可能であり、術前と退院時に身体運動機能評価（SPPB）が可能であった988名とした。術後200m歩行獲得日数と術後SPPB点数低下には直線性の関連が認められ、ロジスティック解析の結果、術後200m歩行獲得日数が1日長いほど術後SPPB点数に13%の低下が認められた[OR: 1.13 (1.08-1.18)]。ROC曲線よりカットオフ値は3日（感度: 73.3%, 特異度48.4%, AUC: 0.63）であった。術後身体運動機能低下を抑制する術後200m歩行獲得日数のカットオフ値は3日であった。
13. 高齢心大血管手術患者の在宅型外来心臓リハビリテーション参加に影響する因子について	共	2019年02月24日	第4回日本心臓リハビリテーション学会近畿地方会（京都）	河村 知範、松尾善美、居村修司、根来ちか、片山智恵、永井佑典、古田宏、今井良英、坂下浄、中野裕葵 在宅型外来心臓リハビリテーション（外来CR）参加率に影響する因子について検討する。対象は当院心臓血管外科で待機的に手術後、回復期CRを実施し、自宅退院となった高齢者で術前評価が可能であった285名とした。ロジスティック解析にて、外来CR参加の有無と術前基本チェックリストの各項目、入院中のリハビリ経過、退院時身体運動機能について検討を行った。外来CR参加の独立した因子として、術後最速歩行速度、術前に預貯金の管理をしている、回復期CRの介入回数、CRキャンセル回数が抽出された。高齢者の外来CRの参加には身体機能に加えて認知機能が影響し、疾患管理に対する個人の理解に応じた介入が必要であることが示唆された。
14. 減量の取り組み強化を要した重症慢性心不全症例	共	2019年02月24日	第4回日本心臓リハビリテーション学会近畿地方会（京都）	神田龍馬、鎌田理之、松本ゆかり、松尾善美、橋田剛一、山口智勢、長井直子、天野美希、神崎万智子、中本敬、坂本陽子、大谷朋仁、坂田泰史 32歳男性。拡張型心筋症。感冒契機に心不全増悪し入院(体重95kg、peak V0214.1ml/kg/min)。強心薬、利尿薬で心不全徴候は改善したが(フォレスト分類Ⅲ型)体重減少も90kgに止まり、4年前の体重72kgから体重の漸増に併せて心機能も低下しており、体重過多も心機能増悪の一因と考えられた。これまでの自己管理では体重管理が不十分であったため、栄養指導や食事摂取量調整に加え、今回、呼吸ガス分析装置を用いた安静時代謝測定と身体活動量計測によるエネルギー収支バランスの評価での減量支援を試みた。急性増悪後、エネルギー収支バランス管理による減量の取り組み強化を試みた重症心不全症例を経験したので報告する
15. 間質性肺炎患者における6分間歩行中の呼吸困難（携帯型呼吸ガス分析装置による検討）	共	2018年11月10, 11日	第28回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会（千葉）	木原一晃、鎌田理之、松尾善美、橋田剛一、平田陽彦、大瀬尚子、瀬尾恵子、新谷康、木田博 間質性肺炎(IP)患者の呼吸困難はQOLに強く関連する。今回我々はIP患者の6分間歩行中の労作時呼吸困難と関連する要因について検討した。対象はIP患者16例(うち特発性IP患者10例)。6分間歩行中、修正Borg Scaleにて呼吸困難とSpO2値を確認した。加えて、携帯型呼吸ガス分析装置にて一回換気量や分時換気量、酸素摂取量等の呼吸循環応答を評価し、診療録より呼吸機能を含めて解析した。6分間歩行時の呼吸困難最大値(3 [1-8])は歩行距離(489±85 m)やSpO2最低値(85±4%)と相関しなかった。呼吸困難は一回換気量(1.03±0.32 l)や分時換気量(41.9±11.2 l/min)と相関しない一方、酸素摂取量(15.4±4.2 ml/kg/min)と正相関した(r=0.58, p<0.05)。また、呼吸困難は最大吸気量/全肺気量(0.39 ± 0.07)と逆相関した。
16. 舌厚と舌圧を規定する口腔機能、嚥下機能、呼吸機能の検討	共	2018年09月8-9日	第24回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会（仙台）	松尾善美、柳澤幸夫、福池映二 長期療養中の高齢者における口腔・嚥下・呼吸機能およびADL指標について検討することを目的とした。対象は小川病院に長期療養目的で入院中の高齢患者に測定・調査が実施可能であった39名とした。まず、超音波エコーにて舌厚を、次に口腔・嚥下・呼吸機能を測定し、さらにバーセル指数を評価した。統計解析には従属変数を舌厚、舌圧とし、独立変数に口腔・呼吸・嚥下機能およびバーセル指標の中で関連の深い因子を抽出し、重回帰分析を実施した。舌厚、舌圧ともに口唇閉鎖力のみが抽出され、舌

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
17. 心臓外科手術後患者における運動機能の変化に影響する術前栄養評価方法の検討	共	2018年07月16日	日本心臓血管学療法学会（横浜）	厚ではモデル予測精度は良好ではなかったが、舌圧では良好であった。長期療養中の高齢患者の舌厚、舌圧は全身状態を反映するよりも口腔周辺機能に影響されることが示唆された。 河村知範、松尾善美、古田宏、永井佑典、釋迦堂可奈、今井良英、坂下浄 低栄養状態に陥ると骨格筋量の減少や筋力低下、免疫力が低下するとされており、栄養状態は生命予後に寄与する因子である。本研究の目的は、術前のCONUTスコア・GNRIと術後の運動機能変化との関係についての検討である。術前GNRIは軽度リスクであっても開心術後の身体運動機能低下に影響を与える可能性が示唆された。
18. 植込型左室補助人工心臓装着患者の6分間歩行距離改善に影響する因子の検討	共	2018年07月14-15日	第24回日本心臓リハビリテーション学会（横浜）	鎌田理之、神崎万智子、松本ゆかり、神田龍馬、松尾善美、橋田剛一、横山淳也、斉藤俊輔、大谷朋仁、戸田宏一、澤芳樹、坂田泰史 左室補助人工心臓(LVAD)装着患者では術後6分間歩行距離(6MWD)が長いほど総死亡のリスクが低い傾向があるとの報告があり、術後の6MWD改善は心臓リハビリテーション(心リハ)において重要な課題のひとつである。今回、植込型LVAD装着術後の6MWD改善に影響する因子について検討した。植込型LVAD装着患者では、膝伸展筋力と吸気筋力両方の改善が術後6MWD改善に重要であることが示された。
19. 地域在住高齢透析患者の活動範囲を規定する因子の検討	共	2018年03月17-18日	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	望月寿幸、松尾善美、石丸達人、森久賢一、佐々木真弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹 地域在住の高齢透析患者の活動範囲を規定する因子に関して調査すること。対象は65歳以上の地域在住透析患者158名。活動範囲の指標(LSA)を聞き取り調査した。筋量の指標には大腰筋指数(PMI)を用いた。さらに、臨床的背景因子として、年齢、原疾患、透析歴、BMI、栄養指標、心機能などの臨床データを診療録より調査した。全対象患者における重回帰分析では、LSAスコアはクレアチニン、性別、アルブミンと関係していた。男女間の比較では、LSAスコアおよびPMIは男性が有意に高かった。性別の重回帰分析では、男性でPMI、女性では、アルブミンと糖尿病の有無がLSAスコアの独立した規定因子であった。65歳以上の地域在住透析患者において、男性は筋量が多いほど、女性は栄養指標が高値であるほど、活動範囲が広がった。
20. 運動耐容能測定に工夫を要した両室ペーシング機能付き植込み型除細動器(CRTD)植込み後症例	共	2018年02月17日	日本心臓リハビリテーション学会第3回近畿地方会（神戸）	松本ゆかり、鎌田理之、神田龍馬、松尾善美、橋田剛一、天野美希、神崎万智子、大谷朋仁、坂田泰史 症例は、拡張型心筋症の49歳男性。2008年CRTD植込み術施行。2016年心不全加療目的に当院入院。心不全加療後に施行した運動耐容能評価では(CRTD設定はDDDR、下限心拍数80bpm)、心拍数は111bpmまで上昇し、6分間歩行距離は605mであった。一方エルゴメーターによるCPXでは、最大酸素摂取量12.2ml/kg/minに止まり、心拍数は80bpmと下限値一定であった。これら測定結果の乖離は、CPX時のセンサーの体動感知不良と推測されたため、運動耐容能評価の代案として、トレッドミル負荷によるCPXおよび携帯型呼気ガス分析装置を用いた6分間歩行中の酸素摂取量測定を試みた。結果、適切に運動耐容能を評価することができた。このような症例では運動処方や生活活動指導に工夫や十分な注意が必要であると考えられ、その経験について報告した。
21. 高齢入院患者の舌厚と呼吸機能・嚥下機能・口腔機能、ADLの関連性	共	2017年10月14, 15日	第4回日本フレイル・サルコペニア学会大会（京都）	松尾善美、柳澤幸夫、福池映二 舌厚と呼吸・嚥下・口腔機能などの関連は不明である。本研究の目的は、高齢入院患者における栄養状態を反映する舌厚と呼吸機能・嚥下機能・口腔機能、ADLの関連性について検討することである。厚は四肢の筋量と、舌圧は握力、呼気筋力、口唇閉鎖力と関連しており、舌厚、舌圧ともにADLと関連していた。舌指標は四肢の筋量・筋力、呼吸筋力、ADLを反映することが示唆された。
22. 肺癌術後在院日数に対する高齢者の術前身体機能の影響	共	2017年10月28, 29日	第1回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（大阪）	鎌田理之、川村知裕、木原一晃、松尾善美、橋田剛一、平田陽彦、瀬尾恵子、木田博、奥村明之進 65歳以上の高齢者では、術前の低身体機能が肺癌術後退院を遅延させることが示唆された。4m歩行時間は6分間歩行や心肺運動負荷試験より簡便に測定でき、術前からの退院遅延予防やリハビリ介入に向けた身体機能指標のひとつとして有用な可能性がある。
23. 間質性肺炎患者における6分間歩行中の呼吸循環応答と歩行距離の関連	共	2017年10月28, 29日	第1回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（大阪）	木原一晃、鎌田理之、松尾善美、橋田剛一、小仲邦、平田陽彦、川村知裕、瀬尾恵子、木田博、奥村明之進 酸素療法導入前の間質性肺炎患者では、酸素化能や呼吸困難、酸素摂取量よりも、換気容量や労作時分

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
24. 筋輝度の皮下脂肪厚による補正が全身持久力との関連に及ぼす影響	共	2017年09月2,3日	第36回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	時換気量の低下が歩行能力を制限する可能性が示された。歩行中の分時換気量、特に一回換気量の増大に着目した運動介入が、間質性肺炎患者の歩行能力改善に有益かもしれない 神田龍馬、橋田剛一、松尾善美 筋輝度は女性において皮下脂肪厚を用いて補正することで全身持久力との関連が深まる可能性が示唆された。
25. 外来血液透析患者の一日平均歩数が身体機能、健康関連QOLに及ぼす影響	共	2017年09月2,3日	第36回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	山下英美子、松尾善美 身体活動量の低下は身体機能および包括的QOL尺度の身体機能のみならず、特異的尺度の認知項目にも影響を与えていた。しかし、その他の心理的要因は大きく影響を与えるものはなかった。身体活動量が2,500歩未満の者は、認知項目の低下により身体活動量が低下していることが示唆された。
26. 心臓血管外科術後の身体運動機能低下を予測する因子について	共	2017年07月15-16日	第23回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（岐阜）	河村知範、松尾善美、古田宏、永井佑典、當尊哲也、坂下浄、今井良英、釋迦堂可奈、東上震一 心臓血管外科術後の身体運動機能低下を予測する因子について検討。2014年1月から2016年9月に臓血管外科で待機的に手術治療を施行した1054名のうち、手術前後でSPPBが測定可能であった連続765名。術前・退院時にSPPBを測定し、SPPB得点が術後1点以上低下した症例を低下群、維持・改善した症例を対照群に分類。検討項目は患者特性、術前生理学的検査結果、術前心機能、術前腎機能、術前身体運動機能、フレイル（介護予防チェックリスト：CL）、手術侵襲（手術時間、術後挿管時間）、術後経過（術後歩行自立獲得期間）とし、ステップワイズ法で抽出された項目をロジスティック回帰分析（LRA）にて検討。LRAの結果、CL：3点以上、術前平均握力であり、ROC曲線よりカットオフ値はCL：3点以上、術前平均握力23kg以上であった。
27. 心疾患入院患者の離職要因	共	2017年07月15-16日	第23回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（岐阜）	西村真人、根来政徳、箕岡尚利、松尾善美、田中彰博、平林伸治 治療および検査を目的に入院した心疾患患者の離職要因を検討する。対象は、当院で2013年に循環器内科および心臓血管外科に入院した20歳から60歳までの心疾患患者249名である。方法は、郵送によるアンケートで入院前の就労状況および退院後の復職状況とカルテより年齢、性別、疾患名、LVEF、eGFR等を調査し、治療入院および検査入院別に検討した。 アンケート回収率は65.1%であった。入院前就労者は治療入院88名、検査入院44名であった。離職と復職の2群間の比較では、治療入院では女性・年齢・職業・疾患・維持血液透析・緊急入院・入院日数に有意差を認め、多変量logistic解析で女性・疾患・職業が要因として抽出された。検査入院では2群間比較で緊急入院のみ有意差を認めたが、多変量logistic解析では何も抽出されなかった。
28. 栄養リスクを有す心大血管疾患患者の開胸後離床遅延予測因子	共	2017年07月15-16日	第23回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（岐阜）	松尾善美、河村知範、古田宏、永井佑典、當尊哲也、坂下浄、今井良英、釋迦堂可奈 栄養リスクを有す心大血管疾患患者の開胸後離床遅延を予測する因子について検討すること。対象は、待機的に開胸術を実施し、GNRI91未満の連続69例であった。術後200m歩行の獲得日より順調群と遅延群に分類し、術前患者背景・術前運動機能（SPPB、握力）・手術関連情報を後方視的に調査した。群間比較では $\chi^2$ 検定、Wilcoxon検定を施行後、ロジスティック解析を施行し、術後離床遅延の予測因子について調査・検討した。遅延群では、術前SPPB点数が低く、手術時間・人工心肺時間が長かった。ロジスティック解析では、術前SPPB点数、手術時間が抽出された。ROC曲線よりカットオフ値はSPPB9点、手術時間315分であった。中等度以上の栄養障害リスクを有す心大血管疾患患者の開胸後離床遅延には術前SPPB点数と手術時間が関与する。
29. 男性透析患者の筋量と栄養、脂質代謝との関連に関する検討	共	2017年06月16-18日	第62回日本透析医学会学術集会（横浜）	望月寿幸、松尾善美、石丸達人、森久賢一、佐々木真弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹 男性維持血液透析（透析）患者における筋量と栄養、脂質代謝に関する因子の関係を調査すること。筋量の指標に独立して関連した因子はBMI、アルブミン、年齢、総コレステロールであった。男性透析患者では、栄養の指標が高値であるほど、筋量の指標も高値であった。また、脂質代謝の指標は筋量の指標を規定する因子の一つであった。
30. ベルト式電気刺激における効果的な刺激肢位の検討	共	2017年05月12-14日	第52回日本理学療法学会学術大会（幕張）	柳澤幸夫、松尾善美、橋田誠一、鷲 春夫 ベッド上臥位での刺激肢位と、我々が考案した刺激肢位を比較し、従来の刺激肢位との違いを明らかにすることを目的とした。ベッド上での電気刺激に比

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
31. 低栄養状態である患者に対する心大血管手術時間は術後運動機能低下を予測する因子である	共	2017年02月23, 24日	第32回日本静脈経腸栄養学会学術集会(岡山)	べ、tilt tableでの実効電流がより高値に設定が可能であった。乳酸濃度においてもtilt tableが有意に高値を示し、より筋収縮への負荷が強いことが考えられた。 河村知範、今井良英、竹本民樹、松本悠作、温井早紀子、松尾善美 低栄養状態患者に対する心大血管手術後の運動機能低下を予測する因子について検討した。 対象は、2014年1月から2015年9月までに心臓血管外科で待機的に手術治療され、術前Geriatric Nutritional Risk Index (GNRI) が中等度から重度リスク群となる92未満であった連続91例。運動機能評価を手術前・退院時に測定し、退院時にSPPB点数が低下する群と維持・向上した群の2群に分類し、術前患者背景(年齢、性別、心機能、血液検査)・術前運動機能(SPPB、握力)・手術情報(術式、手術時間、人工心肺時間)・術後リハビリ経過との関係を後方視的に調査。群間比較では $\chi^2$ 検定、Wilcoxon検定を施行後、ロジスティック解析を施行し、術後運動機能低下の予測因子についても調査・検討した。年齢・手術時間が術前GNRI92未満症例の術後運動機能低下を予測する独立した因子であった。
32. 骨格筋電気刺激が血中および尿中成長ホルモン分泌に及ぼす影響	共	2016年11月26, 27日	第45回四国理学療法士学会	柳澤幸夫、松尾善美、橋田誠一、篤春夫 電気刺激前後の乳酸は刺激前1.1と刺激10分後2.3、刺激20分終了直後2.7の間に有意に増加し、血中成長ホルモンは刺激前0.08と比べ、刺激終了30分後1.8、60分後0.60の間に有意に増加した。尿中成長ホルモンは刺激前0.62と刺激終了60分後1.35で有意な増加を認めた。本研究の結果、電気刺激後10分後、20分後に有意に乳酸が上昇した。これは森谷らの結果と同様であり、電気刺激が主に神経の太い速筋線維を動員し、筋グリコーゲンを利用することから乳酸が上昇したと考えられる。また、本研究では血中・尿中成長ホルモンが有意な増加を認め、肝臓で産生されるIGF-1にも影響を及ぼし、筋の蛋白合成に寄与することで筋萎縮の改善や筋肥大を得ることに繋がると考えられる。今後、症例に応じて運動療法に物理療法の電気刺激併用がさらなる有益な効果を与えると考えられる。
33. 小児神経筋疾患の最大吸気口腔内圧は鼻腔吸気圧で代用可能か?	共	2016年11月11, 12日	第70回国立病院総合医学会(沖縄)	岩田裕美子、松尾善美、齊藤利雄、山本洋史、中川正之、井上貴美子、藤村晴俊 鼻腔吸気圧の測定で最大吸気口腔内圧を予測可能である可能性が示唆されたが、寄与率は低かった。今後SNIPを呼吸障害進行の把握の一助となる評価項目とできるか、握力などの骨格筋指標や血液ガスデータ、健常小児の呼吸筋力値などとあわせ検討したい。
34. 肺癌術後離床に影響する術前身体機能の検討	共	2016年10月10, 11日	第26回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会(横浜)	木原一晃、鎌田理之、松尾善美、橋田剛一、川村知裕、平田陽彦、井口和江、木島貴志、奥村明之進 肺癌術後離床遅延には術前の起立能力が影響する。この予防には、下肢筋力自体より起立能力改善に向けた術前介入が有効な可能性がある。
35. 心臓弁膜症術後の在宅型外来心臓リハビリテーション参加症例の特性	共	2016年07月16, 17日	第22回日本心臓リハビリテーション学術集会(東京)	河村知範、松尾善美、西村真人、大久保裕介、古田宏、中川幸太郎、永井佑典、毎熊青葉、當尊哲也、坂下浄、釋迦堂可奈、東上震一 外来心臓リハビリテーションに参加する心臓弁膜症術後患者は術前BNPが低く、運動機能が高い。術前4m歩行時間が3.62点以下であることが心臓弁膜症術後患者の外来心リハの参加のカットオフ値である。
36. 女性のメディカルフィットネス利用者における日常生活内のスポーツの有無が身体活動量に与える影響と課題	共	2016年07月16, 17日	第22回日本心臓リハビリテーション学術集会(東京)	掘井吉幸、松尾善美、柳本智、戸田勝也、北垣祥平、川崎亮輔、上嶋健治、野木佳男 女性のメディカルフィットネス利用者を対象に、日常生活内のスポーツの有無により、スポーツ群と非スポーツ群に分けた。両群で活動量に差を認めたが、スポーツ群でも運動指針の目標を達成できていなかった。正しい運動習慣の獲得を促す事が課題であった。
37. 左室補助人工心臓植込術後、病棟活動範囲の拡大へ向け介入の工夫を要した一例	共	2016年07月16, 17日	第22回日本心臓リハビリテーション学術集会(東京)	松本ゆかり、鎌田理之、神田龍馬、松尾善美、橋田剛一、天野美希、中村憲史、大谷朋仁、山口修、戸田宏一、澤芳樹、坂田泰史 術前からのディコンディショニングや術後の長期間人工呼吸管理を要した高齢左室補助人工心臓植込術患者に対する入院期包括的リハビリテーションの経験について報告した。
38. 入院期間中の回復期心臓リハビリ介入回数と疾患別在宅型外来心臓リハビリ参加率について	共	2016年07月16, 17日	第22回日本心臓リハビリテーション学術集会(東京)	河村知範、松尾善美、西村真人、大久保裕介、古田宏、中川幸太郎、永井佑典、毎熊青葉、當尊哲也、坂下浄、釋迦堂可奈、東上震一 虚血性心疾患、大血管疾患患者に対し入院期間中の積極的な回復期心リハ介入は外来心リハの参加率を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
39. 地域在住高齢透析患者の活動範囲に心理社会的要因が及ぼす影響	共	2016年03月26, 27日	第6回腎臓リハビリテーション学会	向上させる。 望月寿幸, 松尾善美, 森久賢一, 佐々木眞弓, 田端作好, 福田豊史, 矢嶋息吹 地域在住の高齢維持血液透析(透析)患者における活動範囲に関する心理社会的な要因の特徴を調査すること。対象は75歳以上の地域在住透析患者43名である。life space assessment (LSA)、日本語版ソーシャルサポート (SS) 尺度及びやる気スコア、Barthel Indexを聞き取り調査した。さらに、臨床的背景因子として動脈硬化、栄養状態に関する情報を診療録より調査し、男女間および高LSA群と低LSA群の比較、それぞれの群におけるLSAスコアとの関係に関する解析を行った。女性群のSS尺度は男性群のそれと比較して有意に高く、女性群ではSS尺度の下位尺度である大切な人のサポートがLSAスコアに独立して関連していた。高LSA群と低LSA群の比較では、SS尺度およびやる気スコアに両群間の差はなく、低LSA群においてSS尺度がLSAスコアに独立して関連していた。
40. 下肢筋への経皮的電気刺激が血圧・心拍・脈波伝搬速度に及ぼす影響	共	2015年11月27, 28日	第44回四国理学療法士学会 (松山)	柳澤幸夫, 松尾善美, 橋田誠一, 鶯春夫 下肢筋への経皮的電気刺激が血圧・心拍・脈波伝搬速度に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。対象は健常大学生17名とし、ベルト電極式骨格筋電気刺激装置を使用した。刺激方法は腰部と大腿部、足部にベルト電極を装着し、大腿四頭筋・ハムストリングス・下腿三頭筋・前脛骨筋を20分間同時収縮させた。刺激周波数は4Hzとし、強度は各被験者が耐えられる最大強度とした。電気刺激前後のSBP、DBP、HRは刺激前と刺激終了直後に有意差を認めた。baPWVでは刺激前と比べ刺激終了直後、10分後、20分後に有意な低下を認めた。
41. 骨格筋電気刺激前後の成長ホルモン分泌	共	2015年09月5, 6日	第34回日本臨床運動療法学会学術集会 (仙台)	松尾善美, 柳澤幸夫, 橋田誠一, 鶯春夫 下肢筋に対する経皮的電気刺激が成長ホルモン分泌に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。対象は健常男子大学生14名とした。刺激にはベルト電極式骨格筋電気刺激装置を使用し、電気刺激を実施した。方法は腰部と大腿部、足部にベルト電極を装着し、大腿四頭筋・ハムストリングス・下腿三頭筋・前脛骨筋を20分間同時収縮させた。刺激周波数は 20Hz, duty cycle 5秒on・2秒offとした。電気刺激前後の血中乳酸濃度は、刺激前と刺激10分後、刺激前と刺激終了直後間で有意に増加した。刺激終了直後と刺激終了30分後、60分後間では有意に低下した。成長ホルモン分泌は、刺激前と刺激終了30分後、刺激10分後と刺激終了30分後で有意に増加した。経皮的骨格筋電気刺激は、筋トレ直後の成長ホルモン分泌と同様の効果を得られる可能性が示唆されたものの、個人差があり、今後の検討が必要である。
42. 心血管疾患術後患者における在宅型外来心臓リハビリテーション参加率に影響を与える因子について	共	2015年07月18, 19日	第21回日本心臓リハビリテーション学会 (福岡)	河村 知範, 松尾善美, 西村真人, 大久保裕介, 古田宏, 中川幸太郎, 永井佑典, 毎熊青葉, 當尊哲也, 釋迦堂可奈, 東上震一 入院期間中の患者背景・経過と在宅型外来心リハ参加率の関連性を調査。2014年1月から9月までに当院心臓血管外科で手術治療を施行され、術後に回復期心臓リハビリテーション (回復期心リハ) に参加し、術後入院期間が20日以内で自宅退院した209名。外来心リハ参加の有無は、問診で参加意思を確認し、2群に分類 (参加: 112名、不参加: 97名)。群間比較結果、人工血液維持透析実施の有無、eGFR、SPPB得点、回復期心リハ介入回数に有意差を認めた。ロジスティック回帰分析では、回復期心リハ参加回数 (OR: 1.19)、SPPB得点 (OR: 1.56) が抽出された。術前運動機能が高く、術後経過が順調な患者では、入院期間中の回復期心リハの積極的な介入が外来心リハの参加に対するアドヒアランスを向上させる。
43. 重症心不全に対する長期人工呼吸管理後に呼吸困難のため離床に難渋した一症例	共	2015年07月18, 19日	第21回日本心臓リハビリテーション学会 (福岡)	神田龍馬, 鎌田理之, 松本ゆかり, 松尾善美, 橋田剛一, 天野美希, 神崎万智子, 大谷朋仁, 山口修, 坂田泰史 急性心筋梗塞を発症し救急搬送後、経皮的冠動脈形成術。低心機能にて人工呼吸管理を要し、気管切開術施行後加療目的で転院。75病日に人工呼吸器離床、離床開始となるも、120mの歩行器歩行でも呼吸困難を認め、歩行獲得に難渋した。歩行獲得に向けた介入内容を、一定負荷 (0W) での呼気ガス分析、呼吸機能検査にて検討した結果、運動持続時間5分で、呼吸困難の増悪は労作時分換気量増大と関連を示し、ガス交換比高値、VE/VC02 slope上昇から、好氣的代謝の低下、換気効率の低下が考えられた。さらに呼吸筋力低下を認め、これが換気量増大へ対応困難な一因と考えられたため、低強度の抵抗運動や有酸



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
44. 慢性心不全患者における下肢筋酸素動態の特徴	共	2015年07月18, 19日	第21回日本心臓リハビリテーション学会（福岡）	素運動に加え、呼吸練習も含めた運動療法介入を実施した。2週間後、労作時分換気量の減少、呼吸筋力の改善が得られ、運動持続時間は16分まで延長した。 池田真治、松尾善美、竹内香理、埴平司、藤田雅史 慢性心不全患者の筋血液量に影響を与える因子を検討した。対象者は慢性心不全で入院し、心リハを実施した13例に測定を行った。測定は退院直前に、自転車エルゴメータを用い、近赤外線組織酸素モニタ装置のプロブを右外側広筋に装着し、筋血液量を測定した。運動強度は10W、運動プロトコールは安静（3分）、運動負荷（5分）、休憩（5分）とした。13例を運動中に筋血液量が10%以上の低下群5例（A群）と筋血液量が維持・10%以内の低下群8例（B群）とに分類し、比較・検討した。検討項目は年齢、BMI、血液・心エコー図データ、6分間歩行距離、5m歩行時間、1/2筋再酸素化時間とした。A群のクレアチニン値はB群より高値であった（ $p<0.05$ ）。A群のeGFR値はB群より低値であった（ $p<0.05$ ）。その他は有意な差を認めなかった。運動中に筋血液量が低下する心不全患者では、腎機能が低下していることが示された。
45. 退院後早期の慢性心不全患者に対する在宅型運動管理の効果	共	2015年07月18, 19日	第21回日本心臓リハビリテーション学会（福岡）	高瀬広詩、松尾善美、柳澤幸夫、東根孝次、小田実、真鍋誠、嶋田悦尚、小倉理代、高橋健文、日浅芳一 慢性心不全患者に対する心リハでは、患者の時間的・経済的負担を軽減した在宅型運動管理プログラムが必要である。当院で心不全と診断され、入院中に心リハを受けた患者を2群に無作為に割り付けた。介入群は退院後3ヶ月間活動量計を装着し、PTが週1回電話で歩数と心不全兆候を確認した。また、患者毎に定めた目標歩数まで段階的に増加させるステップ表を作成し、目標の達成状況に応じて歩数を増加させた。対照群は医師による外来受診のみとした。介入群は対照群と比較して6MWD（退院時-退院後3ヶ月：97.4±52.2 m vs 16.7±67.5 m, $p<0.01$ ）と健康関連QOLが有意に改善した。再入院は介入群7名、対照群10名に認めた（ $p=0.22$ ）。本プログラムは参加率が高く、運動耐容能と健康関連QOLを改善する有効な管理方法である。
46. 復職を目的とした心臓リハビリテーションの試み	共	2015年07月18, 19日	第21回日本心臓リハビリテーション学会（福岡）	西村真人、立花慶太、箕岡尚利、佐藤のぞみ、平林伸治、夏梅隆至、松尾善美、甲斐沼尚、渋川貴規、田中彰博、江上康之、船津俊宏、西野雅巳、谷口和博 今回、復職に成功した症例を紹介し、現在の問題点を加えて報告する。42歳男性、職業：左官工。僧帽弁閉鎖不全症、三尖弁閉鎖不全症に対し僧房弁形成術と三尖弁形成術を施行。術翌日より離床を開始し、術後5日より集団運動療法に参加した。CPX後に左官作業の運動強度であるMETs4.3をAT-METsの目標値にして術後13病日に退院。外来通院では、術後4週目よりインターバルトレーニングを開始し、術後5週目からレジスタンストレーニングを下肢に、術後8週目より上肢に施行。術後12週目のCPXでAT-METsが3.46→4.35と改善し、peakVO2が18.6ml/kg/minであった。30kgの重量物運搬による負荷試験においても循環動態に問題なく、術後13週目に職場復帰となった。
47. 在宅パーキンソン病患者における歩行車の使用実態調査	共	2015年06月5-7日	第50回日本理学療法学会大会	奥山紘平、松尾善美、上田祥博、高橋直宏、中村桃子 PD患者の歩行車使用者に着目し、その特徴を調査することを目的とした。2014年4月から10月までに在宅PD患者30名を対象とした。対象者の移動方法により歩行車群14名と独歩群16名の2群に分類した。転倒率は、屋内63%、屋外50%であった。各群の年齢、性別、罹患期間、H1Y、UPDRSスコア、MMSEスコア、SDSスコア、BIスコア、FIMスコア、TUGT時間、10m歩行時間、握力、FOGQスコア、膝関節伸展筋力、活動量に有意な差は認められなかった。屋外での転倒回数では、歩行車群で独歩群に対して有意に低値を示した。また、MFESでは独歩群が歩行車群に対して有意に高値を示した。TMTでは独歩群が歩行車群に対して有意に高値を示した。
48. Determinants of life space mobility relating nutritional status in diabetic elderly hemodialysis patients	共	2015年06月5-7日	第50回日本理学療法学会大会	Mochizuki T, Matsuo Y, Morihisa K, Sasaki M, Tabata S, Fukuda T, Yajima I The purpose of this cross-sectional survey was to explore the relationships between life space mobility and the related factors, such as nutritional status, muscle mass and atherosclerosis in elderly maintenance hemodialysis patients with Diabetes Mellitus. Life space mobility for a total of 121 community dwelling outpatient a

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
49. 下肢筋に対する経皮的電気刺激が成長ホルモン分泌に及ぼす影響	共	2015年06月5-7日	第50回日本理学療法学会大会（東京）	ged 65 years and older, who were undergoing maintenance hemodialysis was surveyed using Life space assessment whose scores are associated with a person's physical capacity and other factors that may limit his/her mobility. LSA score in DM group was independently associated with Cr and GNRI, while LSA score in non-DM group was associated with Cr and nPCR. 柳澤幸夫, 松尾善美, 橋田誠一, 鷲 春夫 下肢筋に対する経皮的電気刺激が成長ホルモン分泌に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。対象は健康者である男子大学生25名とした。刺激方法は腰部と大腿部および足部にベルト電極を装着し、大腿四頭筋・ハムストリングス・下腿三頭筋・前脛骨筋を 20 分間同時収縮させた。刺激周波数は 20Hz、duty cycle 5秒on・2秒offとし、強度は各被験者が耐えられる最大刺激強度とした。成長ホルモンの採取は指頭血を乾燥ろ紙に塗布し、後日分析を実施した。同時に血中乳酸濃度も測定した。電気刺激前後の血中乳酸濃度について、刺激前と刺激10分後、刺激前と刺激終了直後間では有意な増加を認め、刺激終了直後と刺激終了60分後間では有意な低下を認めた。成長ホルモン分泌は、刺激前と刺激終了直後、刺激前と刺激終了後30分後、刺激前と刺激終了60分後で有意な増加を認めた。
50. 長期療養高齢患者の栄養状態が FIM 運動機能項目に及ぼす影響 — NST (nutrition support team) 導入後の検討—	共	2015年06月5-7日	第50回日本理学療法学会大会	矢野広宣, 松尾善美, 柳澤幸夫, 直江貢, 國友一史 長期療養高齢患者の栄養状態が M-FIM に及ぼす影響について調査することを目的とした。対象は、当院介護保険療養病棟において NST を導入した 2011 年 11 月からの 2 年間に入院した経口摂取可能な高齢患者 59 例であった。方法は、身長、体重、BMI、Alb、総リンパ球数 (TLC)、M-FIM、FIM 認知機能項目 (C-FIM)、FIM の総得点を後方視的に抽出し、GNRI と予後予測の指標である PNI (prognostic nutritional index) を算出した。GNRIは、重度と中等度なリスクのカットオフ値 82.0 より高い群と低い群の 2 群に分類した。体重、BMI、Alb、PNI は GNRI 低値群より高値群で有意にスコアが高かったが、M-FIM、C-FIM、FIM の総得点には有意差がなかった。PNI のオッズ比は 0.665 で、BMI のオッズ比は 0.453であった。
51. Efficacy of a home-based exercise program for recently hospitalized chronic heart failure patients	共	2015年05月2-4日	World Confederation for Physical Therapy Congress 2015, Singapore	Takase K, Matsuo Y, Yanagisawa Y, Higashine K, Oda M, Manabe M, Shimada Y, Ogura R, Takahashi T, Hiasa Y The home-based exercise program monitored by using activity monitors and telephone interviews for recently hospitalized CHF patients was safe and effective in improving participation rate, adherence, physical function, and quality of life.
52. Effect of Inspiratory Resistive Loading in Inspiratory Muscle Training on Hyoid Muscle Activity	共	2015年05月2-4日	World Confederation for Physical Therapy Congress 2015, Singapore	Yanagisawa Y, Matsuo Y Suprahyoid and infrahyoid muscle activities induced at 100% MIP are similar to those induced in the Shaker exercise. Additionally, because IMT regulates inspiratory pressure and loads can be modified, patients can select inspiratory resistive loading based on their ability. Particularly, patients with severe decline in function may start from low-load training. These findings suggest that IMT is useful strength training for the inspiratory muscles as well as the suprahyoid and infrahyoid muscles.
53. 植込型左室補助人工心臓装着患者の早期歩行自立には術前右心機能が関与する	共	2015年04月24-26日	第79回日本循環器学会学術集会	鎌田理之, 神崎万智子, 松本ゆかり, 神田龍馬, 松尾善美, 橋田剛一, 大谷朋仁, 山口修, 戸田宏一, 澤芳樹, 坂田泰史 植込型LVAD装着患者の術後の早期歩行獲得に影響を与える因子について血行動態指標を中心に検討した。歩行自立群において一回拍出量係数SVIとRVSWIが有意に高値、右房圧・肺動脈楔入圧比RAP/PAWPが低値であった。早期歩行自立の可否に影響する因子では、年齢とRAP/PAWPが有意に影響していた。植込型LVAD装着患者の早期歩行自立には術前右室機能が関係する可能性が考えられた。
54. 長期療養高齢患者の栄養状態が運動機能に及ぼす影響	共	2015年03月14, 15日	第2回慢性期リハビリテーション学会	
55. 地域在住高齢透析患者の活動範囲の特徴	共	2015年03月21-22日	第5回日本腎臓リハビリテーション学会	望月寿幸, 松尾善美, 森久賢一, 佐々木真弓、田端作好, 福田豊史, 矢嶋息吹 地域在住の高齢維持血液透析 (透析) 患者における活動範囲に関する因子の特徴を調査すること。対

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
56. 在宅介護者における災害時避難行動の意思決定に及ぼす要因の検討	共	2014年11月29, 30日	第43回四国理学療法士学会	柳澤幸夫、中村武司、直江貢、黒上公美子、山本修、佐藤俊徳、瀬戸裕二、松尾善美
57. 入院治療を要した壮年循環器疾患患者における退院後の復職状況	共	2014年11月16, 17日	第62回日本職業・災害医学会学術大会	高瀬広詩、松尾善美、平林伸治、村上直也、小田実、小倉理代、日浅芳一
58. 長期療養高齢患者の運動機能が栄養状態に与える影響	共	2014年10月19日	第25回徳島県理学療法士学会	矢野広宣、松尾善美、柳澤幸夫、直江貢、國友一史
59. 理学療法士における喀痰吸引の実態調査～現状およびインシデントについて～	共	2014年10月19日	第25回徳島県理学療法士学会	柳澤幸夫、中村 武司、松尾 善美
60. 壮年循環器疾患患者の復職に関わる要因	共	2014年10月19日	第25回徳島県理学療法士学会	村上直也、高瀬広詩、松尾善美、平林伸治、小田実、小倉理代、日浅芳一
61. 肺癌術後離床に対する影響因子の検討	共	2014年10月24, 25日	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会	木原一晃、鎌田理之、松尾善美、橋田剛一、川村知裕、平田陽彦、藤村まゆみ、井口和江、木島貴志、奥村明之進
62. 経鼻酸素の連続・同調による投与方法で酸素化が異なった一症例	共	2014年10月24, 25日	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会	柳澤幸夫、竹田絵理、松尾善美、山村篤司郎、堀内宣昭
63. 側腹筋厚が咳嗽機能に与える影響－若年者と高齢者の比較－	共	2014年10月24, 25日	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会	井坂昌明、堀竜次、松尾善美
64. 維持血液透析患者の姿勢変換時における心行動態と自律神経活動および圧受容器反射感受性の変動に関する検討	共	2014年09月06日	第33回日本臨床運動療法学会学術集会	望月寿幸、松尾善美、森久賢一、佐々木眞弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹
65. 在宅療養者における座位姿勢および呼吸負荷圧の違いによる舌骨上筋群の活動	共	2014年09月6, 7日	第20回 日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会	松尾善美、柳澤幸夫
66. 吸気抵抗負荷時における舌骨筋群の筋活動特性～Shaker exerciseとの比較～	共	2014年09月6, 7日	第20回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会	柳澤幸夫、松尾善美
67. 在宅療養中の高齢パーキンソン病患者における栄養状態と運動機能	共	2014年09月6, 7日	第20回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会	奥山紘平、松尾善美、上田祥博
68. 待期的開胸術予定の維持血液透析患者特性について	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	河村知範、西村真人、松尾善美、大久保裕介、古田宏、中川幸太郎、永井佑典、毎熊青葉、東上震一
69. 心臓リハビリテーション施行患者の下肢運動時の姿勢が循環応答に与える影響	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	掘井吉幸、浅井 剛、柳本 智、戸田勝也、片山里佳、松尾善美、上嶋健治、野木佳男
70. 外来通院における心臓リハビリテーションが日常的身体活動量に与える影響	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	戸田勝也、浅井 剛、柳本 智、掘井吉幸、片山里佳、松尾 善美、上嶋健治、野木佳男
71. 兵庫県内の老健及び通所リハに勤務するセラピストへのアンケート調査	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	片山里佳、浅井 剛、柳本 智、掘井吉幸、戸田勝也、松尾善美、上嶋健治、野村史郎
72. 心臓外科手術後早期の自覚的運動強度による運動指導は妥当か？（第一報）	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	西村真人、松尾善美、大久保裕介、古田宏、河村知範、畔柳智、東上震一
73. 心筋梗塞症患者におけるソーシャルサポートが心臓リハビリテーションの効果に与える影響	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	川崎健作、松尾善美、七星雅一、三枝秀明
74. シンポジウム『心リハ難民へのアプローチ：「何時でも・何処でも・誰にでも」を目指して」慢性心不全患者に対する活動量計を用いた在宅型運動管理の効果	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	高瀬広詩、松尾善美、柳澤幸夫、東根孝次、小田実、真鍋誠、嶋田悦尚、小倉理代、日浅芳一
75. 植込型補助人工心臓装着患者に対する運動療法における取り組み	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	神田龍馬、松本ゆかり、鎌田理之、松尾善美、橋田剛一、岩崎朋之、神崎万智子、大谷朋仁、山口修、澤芳樹、坂田泰史
76. 待期的開胸術患者の術前eGFRは術後離床経過の予測因子である	共	2014年07月19, 20日	第20回日本心臓リハビリテーション学会	河村 知範、西村 真人、松尾善美、大久保裕介、古田宏、中川幸太郎、永井佑典、毎熊青葉、東上震一
77. 慢性心不全患者における下肢筋酸素動態の特徴	共	2014年05月30日, 6月1日	第49回日本理学療法学会学術大会	池田真治、松尾善美、小林英史、竹内香理、白井一郎、梶平司、大島富雄、藤田雅史
78. 徳島県における理学療法士の吸引行為に関する実態調査	共	2014年05月30日, 6月1日	第49回日本理学療法学会学術大会	柳澤幸夫、中村武司、松尾善美
79. 長期療養高齢患者の運動機能が栄	共	2014年05月3	第49回日本理学療法学	矢野広宣、松尾善美、柳澤幸夫、直江貢、國友一史

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
養状態に及ぼす影響（第一報）－ 栄養サポートチーム（NST）導入 前の検討－		0日,6月1日	術大会	
80. 維持血液透析患者の姿勢変換時 における心行動態と自律神経活動 の変動に関する検討	共	2014年03月2 9,30日	第4回日本腎臓リハビ リテーション学会	望月寿幸、松尾善美、森久賢一、佐々木眞弓、田端 作好、福田豊史、矢嶋息吹
81. 在宅要介護者の災害時避難に関 する意識調査～訪問リハビリテー ション事業所の災害対策について～	共	2013年11月1 6,17日	第42回四国理学療法士 学会	柳澤幸夫、中村武司、直江貢、黒上久美子、山本修 、佐藤俊徳、瀬戸裕二、松尾善美
82. 訪問リハビリテーション利用者 に対する災害時の安否確認対策－災 害伝言ダイアルを用いて－	共	2013年10月1 3日	第24回徳島県理学療法 士学会	柳澤幸夫、中村武司、直江貢、黒上久美子、山本修 、佐藤俊徳、瀬戸裕二、松尾善美
83. 在宅における理学療法士の吸引 行為に関する実態調査	共	2013年10月9 、10日	第23回日本呼吸ケア・ リハビリテーション学 会学術集会	柳澤幸夫、中村武司、松尾善美
84. 体成分分析装置を用いた筋肉量 評価と蛋白質摂取強化をきっかけ に筋肉量増加が見られ経口摂取が 可能となった一症例	共	2013年09月2 2,23日	第19回日本摂食・嚥下 リハビリテーション学 会学術大会	梅原麻子、高田佳奈、古田結花、川上由香、菊井聡 子、前川ひろみ、柳澤幸夫、松尾善美、長江哲夫
85. 心臓外科術後に左反回神経麻痺 を呈し嚥下障害となった一症例～ 摂食嚥下リハビリと多職種との関 わり～	共	2013年09月2 2,23日	第19回日本摂食・嚥下 リハビリテーション学 会学術大会	高田佳奈、中村武司、梅原麻子、尾形竜郎、長江哲 夫、柳澤幸夫、松尾善美、佐藤中一
86. 低移動能力は術後歩行獲得に影 響するか？	共	2013年07月1 3,14日	第19回日本心臓リハビ リテーション学会	西村真人、松尾善美、大久保裕介、古田宏、河村知 範、頓田央、東上震一
87. 腹部大動脈瘤患者の回復期心臓 リハビリテーション参加率について	共	2013年07月1 3,14日	第19回日本心臓リハビ リテーション学会	河村知範、西村真人、松尾善美、大久保裕介、古田 宏、前宏樹、頓田央、東上震一
88. 兵庫県下における心臓血管外科 手術後のリハビリテーションの現状 と今後の課題	共	2013年07月1 3,14日	第19回日本心臓リハビ リテーション学会	本多祐、久保清景、谷口良司、民田浩一、藤久和、 藤田雅史、水谷和郎、松尾善美
89. 運動療法を含む疾病管理により 良好な経過を得た高度心機能低下 心不全の一例	共	2013年07月1 3,14日	第19回日本心臓リハビ リテーション学会	高瀬広詩、松尾善美、東根孝次、當別當洋平、小倉 理代
90. シンポジウム「心臓外科術後の リハ：開始時期とリハの秘訣」冠動 脈バイパス術	共	2013年07月1 3,14日	第19回日本心臓リハビ リテーション学会	西村真人、松尾善美、大久保裕介、古田宏、河村知 範、頓田央、東上震一
91. 維持血液透析患者における姿勢 変換時の心行動態の経時的変動に 関する検討	共	2013年06月2 0-23日	第58回日本透析医学会 学術集会	望月寿幸、松尾善美、森久賢一、佐々木眞弓、田端 作好、福田豊史、矢嶋息吹
92. 身体組成の違いが定量運動負荷 時の代謝当量に与える影響	共	2013年05月2 4-26日	第48回日本理学療法学 術大会	角田晃啓、松尾善美
93. 鳴門市における在宅要介護者の 災害時避難に関する調査～避難行 動と日常生活機能、移動介助量と の関係～	共	2013年05月2 4-26日	第48回日本理学療法学 術大会	柳澤幸夫、中村武司、直江貢、三木尚代、山本修、 佐藤俊徳、瀬戸裕二、松尾善美
94. Changes in physical activity a fter lung resection for lung c ancer and postoperative pulmon ary rehabilitation	共	2013年05月1 7-22日	American Thoracic Soc iety 2013	Kazushige Maeda, Yuji Higashimoto, Noritsugu Ho nda, Masashi Shiraishi, Takeshi Hirohata, Kenj i Minami, Takuya Iwasaki, Toshiyuki Yamagata, K atsuhiko Terada, Yoshimi Matsuo, Yuji Tohda, K anji Fukuda
95. 維持血液HD患者における姿勢変 換時の心行動態に関する検討	共	2013年03月2 3,24日	第3回日本腎臓リハビ リテーション学会	望月寿幸、松尾善美、森久賢一、佐々木眞弓、田端 作好、福田豊史、矢嶋息吹
96. 左室補助人工心臓装着患者の早 期歩行自立を阻害する因子の検討	共	2013年03月1 5-17日	第77回日本循環器学会 学術集会	鎌田理之、神田龍馬、松尾善美、橋田剛一、神崎万 智子、大谷朋仁、坂田泰史、戸田宏一、澤 芳樹、 小室一成
97. 透析日と非透析日における身体 活動量、疲労感、心理状態、運動 セルフ・エフィカシーの比較	共	2013年03月2 3,24日	第3回日本腎臓リハビ リテーション学会	松尾善美、望月寿幸、森久賢一、田端作好、福田豊 史、矢嶋息吹
98. 施設入所者における身体機能と 口腔機能および栄養状態の関連性	共	2012年11月	第41回四国理学療法士 学会	鈴江正基、平澤小百合、高木賢一、佐藤央一、柳澤 幸夫、松尾善美
99. 肺切除術患者に対する呼吸リハ ビリテーション効果の検討	共	2012年11月	第22回日本呼吸ケア・ リハビリテーション学 会	前田和成、東本有司、本田憲胤、白石匡、廣畑健、 南憲司、岩崎拓也、山縣俊之、松尾善美、福田寛二
100. 呼吸抵抗負荷時における舌の形 態学変化～MRIを用いて～	共	2012年08月	第17回、第18回日本摂 食・嚥下リハビリテー ション学会	柳澤幸夫、松尾善美、春藤久人、三田村正明、堀内 宣昭
101. 心不全入院患者の再入院危険 因子と在院期間の関連	共	2012年07月	第18回日本心臓リハビ リテーション学会	池田真治、竹内香理、梶平司、藤田雅史、松尾善美
102. 糖尿病教育入院後に冠動脈疾 患が発見された症例の臨床的背景	共	2012年07月	第18回日本心臓リハビ リテーション学会	笠原正資、松尾善美、柿花宏信、山下拓、深水真希 、藤久和
103. 植込型左室補助人工心臓装着 患者	共	2012年07月	第18回日本心臓リハビ	神田龍馬、鎌田理之、松尾善美、井上悟、神崎万智

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
の術後動作獲得経過			リテーション学会	子、坂田泰史、坂田泰彦、小室一成、斉藤俊輔、坂口太一、澤芳樹
104. 入院期に包括的心臓リハビリテーションを受けた慢性心不全患者の退院後疾病管理状況	共	2012年07月	第18回日本心臓リハビリテーション学会	高瀬広詩、松尾善美、柳澤 幸夫、東根孝次、小倉理代
105. 運動前後の血糖値変化の提示により、運動の動機づけは向上するの	共	2012年05月	第47回日本理学療法学会大会	笠原正資、柿花宏信、山下拓、高田健司、深水真希、松尾善美
106. 在宅高齢者への呼吸筋トレーニングが嚥下機能・咳嗽能力に及ぼす影響	共	2012年05月	第47回日本理学療法学会大会	柳澤幸夫、松尾善美、直江貢、中村武司、堀内宣昭
107. 術前の冠危険因子、運動習慣が冠動脈バイパス術前後における自律神経機能の経時変化に与える影響について	共	2012年05月	第47回日本理学療法学会大会	河村知範、西村真人、松尾善美、大久保祐介、古田宏、神永絢、津本直美、前宏樹、東上震一
108. 在宅高齢心不全患者における運動の実施状況と健康関連QOL	共	2012年05月	第47回日本理学療法学会大会	高瀬広詩、松尾善美、柳澤幸夫、嶋田悦尚、真鍋誠、小田実、東根孝次、小倉理代、日浅芳一
109. 術前より運動機能に障害を有する症例の特徴	共	2012年03月	第76回日本循環器学会学術集会	西村真人、大久保裕介、古田宏、津本直美、松尾善美、河村知範、鷹岡成年、頓田央、東上震一
110. 超高齢透析患者の身体活動に及ぼす心理的要因の影響に関する調査	共	2012年01月	日本腎臓リハビリテーション学会第2回学術大会	望月寿幸、松尾善美、森久賢一、佐々木眞弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹
111. 間欠性跛行肢に対する外科的血行再建術後、早期グラフト閉塞をきたした症例に対する監視下運動療法の効果	共	2011年12月04日	第22回徳島県理学療法士学会	高瀬広詩、中村武司、柳澤幸夫、出口憲市、前原裕衣、松尾善美、東根孝次、来島敦史
112. 化学性肺炎にて無気肺を呈し、呼吸リハビリテーションが有用であった1例	共	2011年11月	第40回国理学療法士学会	柳澤幸夫、松尾善美、中村武司、長谷加容子、堀内宣昭
113. 肺切除術施行患者の2カ月後の身体活動量について	共	2011年11月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会	前田和成、本田憲胤、白石匡、山縣俊之、福田寛二、廣畑健、南憲司、東本有司、西山理、松尾善美
114. 胸部損傷後に無気肺を呈し、Manual Hyperinflationを試みた2例	共	2011年11月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会	柳澤幸夫、松尾善美、出口憲市、川村圭司、中村武司、片川雅友、堀内宣昭
115. 在宅要介護認定者に対する肺合併症の予防に向けた呼吸筋トレーニング	共	2011年11月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会	柳澤幸夫、松尾善美、直江貢、中村武司、堀内宣昭
116. 在宅の嚥下障害症例に対する呼吸筋トレーニングの効果	共	2011年11月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会	柳澤幸夫、松尾善美、馬木良文、堀内宣昭
117. 心臓リハビリテーション開始直後の心不全患者における血管内皮機能と日常生活動作の関連性	共	2011年09月	第60回日本心臓病学会学術集会	田頭悟志、松尾善美、佐藤真治、奥津匡暁
118. 呼吸筋トレーニング負荷が口輪筋の筋活動に及ぼす影響		2011年08月	第17回、第18回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会	柳澤幸夫、松尾善美、春藤久人、堀内宣昭
119. 心臓外科手術前後で身体組成は変動するか？	共	2011年07月	第17回日本心臓リハビリテーション学会	松尾善美、河村知範、西村真人、大久保裕介、古田宏、頓田央、東上震一
120. 自己調整エフィカシーと退院後身体活動量による心臓外科患者分類の試み	共	2011年07月	第17回日本心臓リハビリテーション学会	心臓外科手術後には体重・BMIが減少し、退院前までに蛋白質量・骨格筋量・BCMが低下していた。退院前指導では、体成分分析指標も含めて運動療法・栄養療法を立案することが必要であることが示唆された。 西村真人、松尾善美、古田宏、津本直美、大久保裕介、河村智範、頓田央、東上震一 心臓外科手術前後のセルフエフィカシー(SE)と術後7日目の歩数で患者を分類することができた。身体活動量とSEを増加するためには、患者の行動特性に応じてアプローチ方法を変更する必要がある。
121. 80歳以上の超高齢者開心術症例の特徴	共	2011年07月	第17回日本心臓リハビリテーション学会	西村真人、大久保裕介、神永絢、津本直美、松尾善美、古田宏、河村智範、頓田央、東上震一 80歳以上の超高齢者は、運動機能障害により移動能力が低く、入院前移動能力まで到達したとしても術前の心機能が低く、ICU入室期間が長期であり、病棟では臥床傾向にあることが多く、転院してさらにリハビリテーションを継続する例が多い。80歳以上の超高齢者では、集団でのリハビリテーションを行うことも困難であり、画一的なアプローチでなく、より個々のニーズや身体機能、社会的背景まで考慮したアプローチが必要である。
122. 維持血液透析患者に対する受動的下肢挙上の検討	共	2011年06月	第56回日本透析医学会	望月寿幸、松尾善美、浅沼芳則、森久賢一、八木賢、福田豊史、田端作好、山本則之、矢嶋息吹

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
123. 肺癌患者における肺切除術前後の運動強度別身体活動量の推移について	共	2011年05月	第46回日本理学療法学会大会	受動的下肢挙上にて健常成人ではSBPは上昇しないが、透析施行中の透析患者で収縮期血圧が上昇する可能性が示唆された。 前田和成, 白石匡, 東本有司, 本田憲胤, 福田寛二, 廣畑健, 南憲司, 岩崎拓也, 松尾善美 肺癌患者の身体活動量は、肺切除術後4日目で術前の状態にまで改善した。運動強度別に比較すると、1.1 METs以下の運動強度の低い活動は、術後3日目で回復したが、3METs以上の運動強度の高い活動が術前の数値にまで改善したのは、術後5日目以降であった。
124. 在宅要介護者に対する呼吸筋トレーニングの効果	共	2011年05月	第46回日本理学療法学会大会	柳澤幸夫, 松尾善美, 中村武司, 堀内宣昭 在宅要介護者1例における呼吸筋トレーニングの効果を検討した。呼吸機能、呼吸筋力が改善し、摂食・嚥下の変化では嚥下困難感・お茶によるむせ・痰のからみ・食事時間の短縮の項目に改善がみられた。
125. 腹部外科手術後の咳嗽介助が呼吸機能及び創部痛に及ぼす影響	共	2011年05月	第46回日本理学療法学会大会	柳澤幸夫, 松尾善美, 中村武司, 片川雅友, 坂東儀昭 腹部外科術後での各術後日数の咳嗽介助有無における創部痛の差は、すべて有意差が認められ、最高咳嗽流量の変化は、術後7日目を除く各術後日数で有意差が認められた。
126. 弁膜症患者の術前腎機能と離床期間の関連について	共	2011年05月	第46回日本理学療法学会大会	河村知範, 西村真人, 松尾善美, 大久保祐介, 古田宏, 神永絢, 津本直美, 前宏樹, 東上震一 術前の推算糸球体濾過量を用いたCKDステージと患者背景・術前データ・手術時の各データ・離床期間との関連について調査術前のCKDステージ分類と離床期間では有意差を認めなかった。
<b>3. 総説</b>				
1. 知っておきたいパーキンソン病患者に対する行動療法	共	2020年6月28日	メディカルプレス、理学療法37(6)	知っておきたいパーキンソン病患者に対する行動療法について概説し、特に米国で開発されたプログラムであり、近年我が国で注目されているLVST BIGの解説、適用の注意点とそれを用いた事例について紹介した。
2. 知っておきたいパーキンソン病患者に対する行動療法	共	2020年6月28日	メディカルプレス、理学療法37(6)	知っておきたいパーキンソン病患者に対する行動療法について概説し、特に米国で開発されたプログラムであり、近年我が国で注目されているLVST BIGの解説、適用の注意点とそれを用いた事例について紹介した。
3. パーキンソン病の筋力低下と理学療法	単	2018年01月	理学療法ジャーナル52: 21-27	パーキンソン病の筋力低下は、等速性運動に対する臨床研究を主に知見が集積され始め、国際的には筋力低下は一つの症状として認識されている。ランダム化比較試験のシステマティックレビューにより、レジスタンストレーニングは軽症から中等症患者の筋力を改善するが、他トレーニングよりも優れているかはまだ明らかではない。
4. パーキンソン病患者の理学療法における脳科学と運動学習理論の応用	単	2017年5月28日	理学療法34:405-410	パーキンソン病患者は、無意識にできていた行為および運動やスキルの学習をより認知的に関与させようとする。目標志向型トレーニングと有酸素運動を組み合わせた研究では、運動制御の認知と自動的要素の双方を向上させる可能性がある。各患者に即した効果的な運動学習と自動化に時間を費やすことが重要である。ランダム化比較試験によるさらなる効果の科学的立証が求められるのと同時に、軽度認知機能障害を把握し、患者の学習能力を評価する必要がある。
5. パーキンソン病患者の運動学習における運動イメージの活用法	単	2015年09月	理学療法32:812-817	運動イメージは、運動の企画や自動化に障害を有しているパーキンソン病患者には重要であり、イメージ中の脳活動については明らかになっている。軽症から中等症のパーキンソン病を有し、重度な認知障害を合併しない患者が運動イメージを活用できる可能性があるが、患者が正確にイメージできているかどうかは明らかではない。運動イメージ単独でなく、身体運動とともに行うと寡動を軽減できる可能性がある。認知運動戦略の一貫として、外的キューとともに運動イメージを使用することが推奨される。
6. 臨床実践講座「摂食・嚥下障害と栄養管理」高齢者の嚥下機能と理学療法士の役割	共	2013年12月	理学療法学 40:493-500	柳澤幸夫, 松尾善美 高齢者の嚥下機能と理学療法士の役割について詳述した。主として、誤嚥性肺炎、摂食・嚥下機能のスクリーニングテスト、嚥下能力の評価、トレーニング方法について解説し、事例紹介も加えた。
7. ALS患者の理学療法	共	2009年12月	Monthly Book Medical Rehabilitation 113:31-36	松尾善美, 橋田剛一 理学療法は、ALSの重症度に応じた対応が求められる。軽度から中等度の負荷強度を個々の症例や筋毎に適切な判断を行った上で与えれば、短期の陽性効果が得られるであろう。全身持久力の改善には、嫌気性作業閾値までの有酸素運動が適している。必要であ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3. 総説</b>				
8. こんな時どうする—パーキンソン病の主要症状に対する理学療法 (4) 拘束性換気障害	単	2009年06月	理学療法ジャーナル	れば補助換気併用下で実施する。患者に適した歩行練習の手段を選択し、かつ日常環境を踏まえた上でどのように歩行にアプローチを実施していくのかを判断し、介入する。 パーキンソン病の拘束性換気障害には、早期より予防の視点も踏まえた介入が重要である。評価のポイントは、深吸気時の症状優位側下部胸郭拡張度を対側である非優位側と比較することである。この際、同時に呼吸機能検査、呼吸筋力測定を行っておくことが望ましい。治療としては、頸・肩甲骨周囲の緊張緩和、胸郭・体幹の運動制限改善、姿勢の改善、有酸素運動としての全身調整運動などが有効であろうと考えられる。
9. 健康増進・内部障害に対する理学療法教育—現状と課題	共	2008年07月	理学療法ジャーナル	松尾善美, Lawrence P. Cahalin 健康増進・内部障害に対する理学療法教育は、日本、米国においても今なお十分ではない。日本は、米国と比較して全教育時間に対する健康増進・内部障害領域の時間数が少なく、各領域にバランスのよい教育を行うことが急務である。理学療法専攻の学生に就学中から健康増進・内部障害に対する強調と職能団体によるキャンペーンを同時に行うことが、すべての患者に予防と健康への注目を導き出すこと契機になるであろう。
10. 呼吸・循環障害の医療経済、介護・医療・福祉制度	単	2008年06月	Clinical Rehabilitation 別冊	我が国の医療経済政策は大きく変貌する途上であり、広い視野から呼吸・循環障害に対する医療経済と介護・医療・福祉制度を概観する必要がある。呼吸・循環障害者およびその介護・医療・福祉に携わる職種にとってもこれらの事項は大きな関心事である。本稿では、呼吸器・循環器疾患における医療経済がこれまでどのように捉えられているのかについてまず解説し、次に呼吸・循環障害者の介護・医療・福祉制度について述べる。
11. パーキンソン病患者の嚥下障害に対する理学療法	共	2006年08月	理学療法	石井光昭, 松尾善美, 日下隆一 誤嚥性肺炎を反復していたパーキンソン病患者に対するチーム医療に理学療法士として参加した経験から、嚥下障害に対する理学療法の取り組むべき方向性について述べた。誤嚥防止策や咽頭残留除去手段の実行を妨げる要因となる姿勢異常や二次的な頸部可動域制限の予防を図る理学療法が重要であった。
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 高齢心不全患者に対する理学療法	共	2020年07月01日	DVD版、ジャパンタイム(株)	松尾善美, 西村真人 高齢心不全患者に対する理学療法について、病態とフレイルの基本、胸部X線写真の特徴、心エコーの基本、リスク管理と運動療法の実際について解説した。
2. 心臓リハビリテーション	単	2020年03月	PTラーニング (e-learning, (株) プロアシスト)	心臓リハビリテーションについて最新の知見を盛り込み、解説した。
3. 心臓リハビリテーション	単	2015年07月	PTラーニング (e-learning, (株) プロアシスト)	心臓リハビリテーションについて解説した。
4. パーキンソン病の理学療法	単	2015年07月	PTラーニング (e-learning, (株) プロアシスト)	パーキンソン病の理学療法について解説した。
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 平成30年度大阪透析研究会コメディカルスタッフ研究助成事業	共	2018年02月21日	大阪透析研究会	高齢者ケアに関する研究 研究者：望月寿幸、共同研究者：松尾善美、森久賢一、田端作好、石丸達人、佐々木真弓、福田豊史、矢嶋息吹、20万円
2. 科学研究費 基盤研究C	共	2017年04月	文部科学省	「在宅療養高齢者に対する骨格筋電気刺激トレーニングの効果を引き出す新たな手法の開発」(平成29-32年度)、分担研究者
3. 科学研究費 基盤研究C	共	2016年4月	文部科学省	「高齢患者に対する舌厚評価を交えた呼吸筋トレーニングの効果検証」、直接経費280万円(平成28-31年度)、主任研究者
4. 平成27年度大阪透析研究会コメディカルスタッフ研究助成	共	2015年02月17日	大阪透析研究会	地域在住高齢透析患者の活動範囲に心理社会的要因が及ぼす影響に関する検討 研究者：望月寿幸、共同研究者：松尾善美、森久賢一、田端作好、佐々木真弓、福田豊史、矢嶋息吹、10万円
5. 公益財団法人大同生命厚生事業団地域保健福祉研究助成	共	2012年08月		「徳島県下の在宅リハビリ従事者に対する吸引行為の実態調査および安全対策に向けた試み」、研究代

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
6. 財団法人在宅医療助成 勇美記念 財団在宅医療助成	共	2012年07月		表者：柳澤幸夫、中村武司、松尾善美、30万円 「在宅要介護者の災害時避難への意識調査および住環境と身体機能が避難行動に及ぼす影響」、研究代表者：柳澤幸夫、中村武司、直江 貢、三木尚代、山本修、佐藤俊徳、瀬戸裕二、松尾善美、22万円
7. 大阪ガスグループ福祉財団調査・ 研究助成	共	2012年04月		「高齢慢性透析患者の身体活動量に及ぼす自己管理能力、健康関連QOL、心理的要因の影響に関する研究」、主任研究者：松尾善美、85万円
8. 科学研究費 基盤研究C	単	2012年04月	文部科学省	「要介護認定者に対する呼吸筋トレーニングの開発」、直接経費300万円（平成24-27年度）
9. 平成23年度大阪透析研究会コメディ ィカルスタッフ研究助成	共	2011年	大阪透析研究会	「超高齢透析患者の身体活動に及ぼす心理的要因の影響に関する総合的調査」 研究者：望月寿幸、共同研究者：松尾善美、森久賢一、佐々木眞弓、田端作好、福田豊史、矢嶋息吹 10万円

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年10月2019年07月	第25回心臓リハビリテーション学会プログラム委員
2. 2018年10月2019年06月	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会プログラム委員
3. 2017年11月01日～現在	文部科学省 大学設置・学校法人審議会 大学設置分科会 リハビリテーション専門委員
4. 2017年07月	Tohoku Journal of Experimental Medicine: reviewer
5. 2017年03月2019年06月	日本心臓血管理学療法学会 運営幹事
6. 2016年09月～現在	日本心臓リハビリテーション学会近畿地方支部幹事
7. 2016年09月～現在	公立大学法人大阪府立大学総合リハビリテーション学部非常勤講師
8. 2015年10月2016年06月	第53回日本リハビリテーション医学会学術集会プログラム委員
9. 2015年06月14日2019年05月	日本心臓血管理学療法学会 運営幹事
10. 2015年05月2019年05月	国際呼吸循環理学療法連盟（世界理学療法連盟サブグループ）理事（日本代表）
11. 2014年09月～現在	日本心臓リハビリテーション学会編集委員会委員
12. 2014年08月2016年07月	日本心臓リハビリテーション学会指導士認定制度委員会委員
13. 2014年04月～現在	日本循環器学会
14. 2013年08月2013年06月	国際呼吸循環理学療法連盟（世界理学療法連盟サブグループ）
15. 2013年07月2015年07月	日本心臓リハビリテーション学会Young Investigator Awards選考委員
16. 2012年09月～現在	日本腎臓リハビリテーション学会
17. 2011年09月～現在	European Association for Cardiovascular Prevention and Rehabilitation
18. 2011年02月～現在	日本摂食・嚥下リハビリテーション学会
19. 2010年05月2015年03月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部外部研究倫理審査委員
20. 2009年1月～現在	兵庫県臨床心臓リハビリテーション研究会 世話人 日本体力医学会 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会 日本リハビリテーション医学会 理学療法科学学会 日本心臓リハビリテーション学会 大阪呼吸ケア研究会 世話人 日本理学療法士協会